小精雅說

三

大正十三年三月中院起筆

特別
イ4
1919
361

176629

小物雜後 三

大正十三年三月十三日起筆

○西三方者も同じ海を得るものゝ内二三枚ごとに記す

一の暦武鑑　一冊

半紙もつて武鑑の内古きを且つ稀覯なる

以年號の内に記す、巻尾に明暦四年

三月十日松倉重政とあり、内閣家譜代

の武鑑也、價非五円とゝ雖も此頃の物価

也

38- 9150

一續清閑雅興　上下合一冊

趙南の印譜なり、余が案中北出の
印譜なり、印を續の篇を賜へ北者甚
首に高頭高の序甚に居に傳云
度の跋あり、収る所の印を支那歴朝
人物の印に、其目左のごし

○漢高祖印位廿八人
○三國名臣
○竹溪六逸　李白外十人
○濂洛六君子
○朱子印後益宮位子
○建安七子
○唐十八学士

此印譜に称親の序あり、譜中往に自印を親
る北人一時の名手也

一　北宋刻畫大觀　二十冊

何人の業か北宋の挿繪ある後本の祠
者を玄刻畫の郭家を基集して冊子と
なしたるもの、家家北行の時家
に傳ずる異なるを以て、併し北宋の挿繪

ある後本を今日の北斎の傑作とし、挿絵の多
を惹き笑を出本を崩さず出来ることと
す、余偶ま北斎讃本挿画大観と題する
を繙くあり讃本の流を作りし北斎
の作を略々備わるが如し但し底本
四冊解三冊なれども挿絵を
漏れず、虎人を取るに拙なるこの
作あり、虎人赤と共黄黒を書する
る北斎一種の特徴あり、一種も北斎
八遠域とす、余を以て北斎画の後

本を義経、之れを輝三元人とす、二
十冊中後と題のお出来ず世多く行はれず、
刻書切つて売じ優るものあり、左に其目
録を掲ぐ

菊美　山椒大夫
南柯夢　椿説弓張月
四と卿涙　聖徳太子
梅柳新志　松三
雪枝雪　国の雪
北紙奇伝　梅作巻

怪鼠傳　外一標題和歌

以上十四種、版いづれも鮮明なり、畫の巻
者とし云へども、京都山田芸者也と出づ

一武具短歌回致　二冊

山鹿素行の武具短歌の回致也、和蘭
稲葉通)あの輪出る来、此回覧を接
必要の場合多し、別して歴史回覧に
ものを欠く可からず、現に此書を接
雅邦の手源を紀するものとの為
記あり

一驛路之鈴　二冊

寛永元年の刊行に係る者の名を刊せ
す東海道沿和記なり、此書は版名和記の
内に入るべきものなるが、猶し年代古るが為め
時候をしく勝れたるも、文言回
横も、和歌俳句をかくる所も、皆古版
名和記の系統を汲みたるもの也、時候十
五月也

一芸海八景　并和歌

此書は八景の図と和歌を収め、二

巻丁数多く全部の数を収む、著作志の大
も古きものなるべし、あるいは元禄の刊本なるべ
き三巻を顔けあるも出版に出来ずして
又なるらし、出板色も稚んな出ることあるも
三巻目の出ひなることなるべし

一　武家女鑑　　全一冊　上冊本

北書津藩の儒清水東陽の著なり、東陽は
紀州人なるも出て、婦女子の用を作れる
為に撰修せるものなり、婦道を主とせるものの
ようなれども、余自身これを無用なるべしと

東陽の古詩大観并に道歌を出せしなる三冊
本を見るに早く、東陽を女学と改味あるべ
き一二説を立てしことあるべしかども、果して
余の二説とおなじく、北書なり、東陽を
女子の教育家とする余の説を溯ること
八北書も捨てがたし

一　四字攷　　一冊

竜田鵬斎著　文政六刊　門人山崎
松南の跋あり　鵬斎に他著あること少
きゝも多くの刻本を得ること亦也

此山号を稿れども、いろは四十六文字
の源流を繹ねノヨウシの語を西しれ
るものなり、

一　安政二年江戸大地震出来付　一冊
件々若双紙体の小冊なれ名時節柄此也
珍とせども、標紙ハ十マツの図あり、書ら火
災のまを志るし、雷鳴と記あり下欄に
火災の図あり、安政見聞録と世と用禄
志の材料ハ作すべきものとす

一　歌山陽実甫帳　一冊

此山ハ文政十二年神田春平に撰り初七
年、実甫ハ春平の叔父にて美濃人
神田元吉実甫柳浪と称し名人
なり山陽の門人也、此帳収る所皆
山陽の上実甫と共に作る也、詩あり尺
牘あり、題跋あり、曼公寺跋自題小
影ども山陽の自筆なり、跋也、尺牘二
通ハ薄文なれども、山陽の詩を
活抜式に刻して名もの多しと表、ハ
此帳のく、他の活帳に比すれハこれなり

就学ノ、必要独者の養育に資する事を得
べし

○早稲田大学十三年度の経費ハ十五万の維持費金と提出されたれ、後年に伸張したる二十六万円の額を見るべしと、一年三十万円位の経費を可なり大きなる額なりとのそ思へり、本年度いろくの事情から学生の数の最も多数である者の為に収入を多く額にある、支出の方は給料の部に春秋二万四五千円の各部科に充てんとする為に設ける部局的に学生を増す為めなを設けたる為めである、追て学校の規模が

本年度豫算ハ震災ノ影響ト経費ノ自然的増加ノタメニ収支ノ適合頗ル困難ナルガ故ニ専門部及工手学校入学希望者ノ極度ニ収容シ両高等学院及高等師範部ニ於テモ制限以上ニ入学生ヲ増加シ同時ニ夜間専門学校ノ新設ニヨリ学費、登録料、試験料等ニ於テ約拾五萬六千圓ノ増加ヲ計リタルモ教職員給其他ノ人員費ニ於テ自然的増加ニヨルモノト夜間専門学校ノ新設其他学級数ノ増加ニ基ク経費ヲ合算スレバ約九萬圓以上ヲ増加シ物品費ニ於テ極度ノ節減ヲ加ヘタルモ尚ホ震災後ノ物價騰貴ノタメ或種ノ費目ハ部ニ増加シ又臨時費ニ於テハ本年ニシテ理工学部ノ設備補充ノタメ約参萬圓ノ増加ヲ餘儀ナクセラレタルガ故ニ震災復旧工事ノ急ヲ要スルモノ勘カラズト雖営繕費ハ之ヲ前年度ニ比シ僅カニ七千餘圓ノ増加ニ止メ辛ウシテ収支ノ適合ヲ計レリ

大正十三年度經常部豫算

收入之部

科目	十三年度豫算	十二年度豫算	增減差額
學費	一八一三四九三〇	一九八二九〇〇	增 一四二四三〇
大學	一九四三九〇	二一〇〇八五	減 一九六九五
專門部	二七六四一〇	二六三一六〇	增 一四〇五〇
第一高等學院	二二八六〇〇	一八三三八〇	增 四三三八〇
第二高等學院	九四一〇〇	八六六〇〇	增 二〇五〇〇
高等師範部	六二四二〇	五六二二五	增 九六九五
工手學校	一三七八〇〇	一〇五七〇〇	增 二二九〇〇
專門學校	四八〇〇〇		增 四八〇〇〇
登錄料	二七六一五	二一一〇五	增 六五一〇
試驗料	四一〇四〇	三三八六二	增 七一六八
實驗實習費	三三〇四〇	二四五一六	減 一四六〇
株式配當金	一三二六五	一三二六五	
受入利子	三五〇〇〇	二四六六九	增 三三〇〇
雜收入	八五一〇	三六八〇	增 五三三〇
計	一二六三五一〇	一一〇三二一九	增 一六〇二九一

支出之部

科目	十三年度豫算	十二年度豫算	增減差額
教員給			
本部年俸	九九八二二四	九三二五九六	增 六五六二六
理工學部年俸	二〇〇八九五〇	二〇〇六四〇四	增 八二一〇
第一高等學院年俸	一〇三六九八	一〇三九〇二	減 二六二〇
第二高等學院年俸	八五八五〇	八五五四〇	增 九〇〇
本部時間給	二九八八五〇	二九六〇〇	減 二九四
理工學部時間給	三一〇〇〇	二二〇〇〇	增 二五〇〇
第一高等學院時間給	一〇八〇〇〇	一〇四〇〇	增 四〇〇〇
第二高等學院時間給	一五五〇〇	一一四九五	增 四〇五
本部主任給	七八〇〇	四八〇〇	增 二九〇〇
理工學部主任給	一〇〇〇〇	二九〇〇	增 一〇〇〇〇
第一高等學院主任給	三〇〇五〇	一六〇〇〇	增 二六〇〇
第二高等學院主任給	六八〇〇	六〇〇〇	增 六〇〇
工手學校	八七〇〇〇	六六三〇〇	增 二一〇〇
專門學校（授業料）	一三六五四〇	一二五四〇	增 一三五四〇
職員給	一五八七六九	一三六四三二	增 一五三三七
小使給仕職工給	三八九八一	三四七五三	增 四七二七
雜給	一九九四〇	一七一七〇	增 二七六九

慰勞手當　一八五四六八　一　七七九七一　一　七四九七

旅費　四一〇〇　一　四一〇〇　一

給與被服費　三六〇〇　一　三〇〇　一

實驗實習費　三九八六八　一　三四八二　一　減

消耗品費　二五三七八　一　二六四〇四　一　減

炭燈費　七八〇〇　一　六〇六八　一　增

薪炭費　二三五一九　一　一九〇八　一　增

通信費　六四六八　一　六四三七　一　增

乘車費　七三〇八　一　四四四八　一　增

圖書費　二二四七〇　一　二二五八三　一　增

器具費　一三二六〇　一　一〇二〇〇　一　增

火災保險料　一〇八五九　一　九四三六　一　增

敷地料　二九〇　一　三五八〇　一　減

衛生費　三一四〇　一　四四八〇〇　一　增

諸稅　八三六二　一　四三三　一　增

營繕費　二九八三八　一　二三四三三　一　增

廣告費　一一一四〇　一　四〇〇〇　一　增

集會費　七二〇〇　一　六八〇〇　一　增

得業式費　四一〇〇　一　三一〇〇　一　增

學會補助費　二九三七　一　二六四〇　一　增

体育會補助費　一〇〇〇〇　一　一〇〇〇〇　一　增

校友會補助費　四八〇〇　一　六八五六　一　減

永樂倶楽部補助費　一八二〇〇　一　八二〇〇　一　增

大阪實館雜誌費　一八七〇〇　一　一〇〇〇〇　一　增

學術雜誌發行補助費　四五〇〇　一　三〇〇〇　一　增

海外留學生費　二〇八〇〇　一　一〇〇〇〇　一　增

教職員生徒賞金　一二六〇〇　一　一八〇三二　一　增

雜費　一九〇四〇　一　一六二二〇　一　增

豫備金	二〇〇〇	一一三六	二二〇	八六八〇
臨時費	五一三六〇	一九四三〇	—	三六三三〇
計	一六三五一〇	一〇三三一九	—	一六三九一

廣告費就テハ各部の主任ガ部内的豫算ヲ為スコトガ必要ト認ムルモ之ガ為ノミニ復四ツ目ヲ要スルガ如キハ無カラシメ度シ

六、図書館の新築費ハ未ダ決定セズ

大正十三年度基金部豫算

收入

科目	金額
基金繰込額	四八〇〇〇〇
受入利子	三〇〇〇〇
地代及貸家料	二三四八八〇〇
土地賣却純益金	
文部省補助金	二五〇〇〇〇
前年度繰越額	三四五〇〇〇
計	四一七三四八八〇〇

支出

科目	金額
第五四伏託資金	九七八七五
図書館建設費	二四〇〇〇〇〇
應用化學科復旧建設費	七〇〇〇〇〇
小計	四〇七八七九
次年度繰越額	九四七三八八〇〇
計	四一七三四八八〇〇

大正十三年度基金支出請求書

一金四拾萬七千八百七拾五圓也

内訳

一第五回供託資金　九七八七五円〇〇〇

但シ四分利佛貨公債五百法券七三五枚（此額面邦貨換算額
（四〇五〇〇円〇〇〇）一枚一三五円〇〇〇替

二圖書館建設費　二四〇〇〇〇円〇〇〇

總額四〇〇〇〇〇円〇〇〇〇ノ内本年度支出分

三應用化學科復興建設費　七〇〇〇〇〇円〇〇〇

右大正十三年度ニ於テ基金部ヨリ支出御兼認被成下度候也

大正十三年三月

維持員會　御中

基金管理委員會　御中

總長　高田早苗

○昨日の懇談ニ得る回答の内ニ入すべきものハ左の三點

一論語抄　解題一冊附　上村觀光解題を乞ふ　六部

徳富蘇峰氏の成簣堂叢書として出版し
たるもの内の一にして、こんき書家五山の僧の注
し比宮本を基礎模しにして解題を論語
の古鈔本全部ニ亘つて施ふ北鈔本を天
隠龍澤の心ゆくまでとゝのへたる五山の
僧の抄本を活集なるべく、往書を極めてある
い、その意味に於てこれを珍とすべきものなり

一日本外史俚言抄　二十七冊

これを日本外史を中心に沒しにしたもの著者は
佐藤木向陽と云人なるが、外史を中心にして
詳しくなるべき内容をこゝに
豐臣氏　全部稿本にて、豐臣氏以下を闕け
てゐる、又五六冊缺本のあるのを搭ぬべきに
あるが、これも終に出版するまでのつゝもの
であるから、他に無刪本の無いものである
文章は或と原文を没し全く軍記体の書き方で
よく出来て居る、著者の為人未だ考究あり

一日本外史俚言抄　二十七冊

元々日本外史を甲乙丙に分したるに過ぎず著者の估に木向陽と云人なれども外史を甲乙丙に分ち論じたるは内容こんの如くなるいまだあるべし

量産氏は全部稿本にて、量産氏以下を閲けてみるに、又五六冊缺本のあるのみ惜むべきなれども、これも終に出版されたるものなれば、他に無刪本の無いものである

文章は或は原文を没し全く軍記体の書き方によく出来て居る。著者の為人未だ考究皇あらず

一 日本外史俚言抄　二十七冊

えんな日本外史を平出和こなしたもので著者は

一 やまこうち　一冊

古つの人物村夏海公信義の形勢を紹
しかるに名を養と富田家に記
すると古譜の断片や絵巻物などある信示
の図をもとめ、奉出物大本にて
巻首に古川躬行の序あり、明治三年
刊行されたるものにて、おもきに拙なる物
と今も頗る稀なるものとなり

一 京四山金石図説　六本　四冊

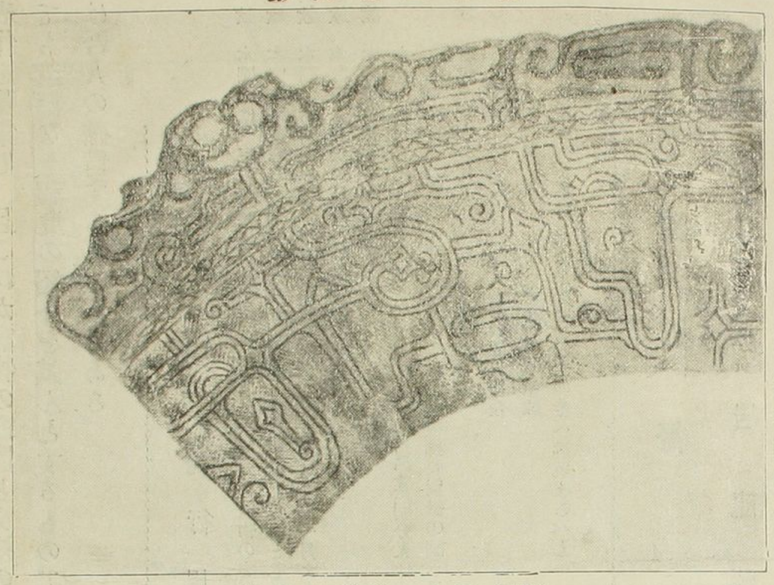
吹日出版えんとまうて偏者八木壹栄

○同寺境内にある重要金石録の拓本を多く収めたるあり、あるの解説を附したるあり、後未刊四山の金石ハ支那の著名きの物も、集古十種に採録せられたるものを極めて多く、偶〻北山に游ぶるの暇あれば不完全の為め五石混合の金石録を検出することを容易ならずいまだ何人か完璧の作んことを思ふ所なり此者の公刊あり、一部金石書として従来の北方面の缺如を補い得るを以て、金石学問の為め北山に登る

人の少なるか展覧の栞と謂ふべし（三月十九日記）

○原始文様を土器に写し取り以て上世模様研究の資に供するものあり、四輯近頃に刊行せられ、余も寄贈を受けて熟閲し、原始時代と云へば唯だ石器骨器のみと思ふに、これら数多くの考掘品を研究せらるるは、近来追〻人類学者や考古癖の人〻採掘せらるる北書のうちの五品の文様をうつし出すものにして、動ともすれば高位を度外の

甕形土器文様



拓本（一色刷圖版）

（原寸高サ一尺四寸五分）

U字形土器文様

拓本（二色刷圖版）

原形寫眞

（原寸高サ六寸）

すなわち、世模擬とうくべ、何等かの物と形とるう物像とすり、全く無意味のものを直ちにあらざるあるべし、本来模擬し本能と寧ろ物の形似を離れて獨立の一体を為すものと思いる、北喜義らすれば我邦の模擬は追と本色を脱却せしてあるる似たり、左て収むる拓本のごとき原始文様の産るるもの一二なり、北等の模擬を文的人の意匠とまして也聊しうるさるべしのなり、否な動もすれば文的人の意匠をそのまま及ぼさるものあり、おのずから古代模擬の源流は別の所にあり、原始の意匠寫り響数と位まるものあり

○今日石佛の拓本と室生寺の佛像大觀を友人より贈られ受く、石佛の拓本は大和三輪の麓の某山上に現存するものなり、甚尊い○早く失せ、今存するは左右二体即ちこれなり、其大きさ大面幅一尺程つゞき這し居る程のものなり拓出の見るに二躯共完全なり、刻年を遽に断し難きも恐らく平安朝以前のものなり、従来金石家は（金属製の）採訪せざるの偏して此等石佛を閑却し居ること久矣、余曾て北三佛も初めて拓を受け居るなり、余は一が中心となる近畿考古学術の研究をつけつゝあり、此拓本も其同人の手を煩して得

んるものなり、又室生の室生寺とは著名の寺刹なれども其中なる佛像を従来研究を遂げ或る数者の外は全く閑却されたるものなるが、今度に據て多くの佛像が完全脱落して初めて世に現ずることなるべし、北佛像は大小刻なるを数え、多くの弘仁の作と見るべきものも体制荘重典雅にして美術界の偉観なり、これ実に今日の宝物なるを寧ろ不思議とも云ふべきなり、今の今度申受けたるを第三輯迄まで而後刊行を期するなり如し（三月廿一日記）

○慶長版字本と見るべき史記は稀覯なれば多く不の機

今之を、今傳来の諸本と五種まで標本として集めたる字を見るに、之れを極めバ九行十七字本と八行十七字本とに、九行十七字本も無罫なるものあり、年代略々近き板なるも判別甚だ難し、世に角倉版と唱ふるものあり、果して此五種の内何れを作すか、或ハ八行十七字本なりと云ふものもあれど、尚研究を要するが如し（直江版ハ版式も異なる形なれ共ハ此部類ハ多い）

三月廿一日記

○近日閑を得て漫ら揮毫せるもの積もり堆を為す、尚日数十紙を束ねて風家に贈り、後人の欲する任せて與へしものなるべし、紙数六七十紙を要すと存ず

十

偶ま石塚松穎出来余の家に存ずるを覩る、余之を請ふて之れを卿里に招ぎ、松穎曰く、廉塘と立ち衆識既成次遂に筆を奪ハんとす、而して其の題落已ハ即ち余の日襲筆なるを以て遂に人の為に落ちるを余を知る、松穎の素善し之れを以て遂に人を鈎先とするなり、余之を銀し悉く之れを與へて曰く、是れ余の推薦状なり、曰く然れ之れを欲せば漫ら其へて可なり、然し尚ほ必要とあらば更らに数十紙を揮灑するを許せり、拙書素もと幾ど價なし、敢て人もまさこれ拙を賣るべしと一笑す

（三月廿一日の記）

○豊太閤の詠歌として世に傳ふるもの若干あれども其数は
十指を屈する位なれ、されど皆確らうやうやの数あり
予実豊公の詠歌は或ものあるものか、それと修史
の信ら種々の文書と就て元祖ゝ考ふるに日下覓て
其得ざるものを輯録し、出下の考証を附して刊行
しようとする世を稀なる行ひなる、予固より一冊を得て
閲覧するに五十首ばかり録しあり、こは何の古写き
文か、撮りも獲ざるものなれ且つ初録の抜粋なる
ばかりも假托のものなるもあるべきを録ず、中まは

きうくの高見を出来ざるものあり、豊公詠ずる文
章とし云ふべきに似たり、此者を三十一年の出版と
係り石印本なる巻首に日下の漢文の序あり（三月
廿二日の記）此集中にある北大名公卿等の唱和の和歌も収
めあり、左は豊公の心二三をあげす（豊公の和歌の後歌は
松の一家なり）

聚楽行幸の折寄梅祝

義代の君かゝやきし那波なる人縁木とこのき軒のたまゆ
陰佛不ふるゆ角人さくを踏りけるか
（下句）

立のその濱の真つ砂いつくるも限りあらしる君の歌は

文禄征韓のとき

日のことゝなりしとうるる四七年入と雨とうるる世の春日は
ああ

文禄三年閑屋の花の春

普門山淮とむるといふけれども今宵も花のうけはやとうん

実歌

世の中は旨計とを越しけれ咲るハさきうの咲のハ花

辞世

流とをちつ雨ときえすしらの為なるなるの為の為の為

○拙著「板味の山易」の昔端の小傳を載するハ月無

此書はすべて民書のあるものと有るも特徴のとするもの小傳を載する代りに山陽の二方面を細叙し、之を以つて系譜と為さんと二の間を費したり、山陽の大家なるまの数奇と其学と、山陽の板味性に就し稿を此り別りこの二方面を特に本書の内容の関係ある故と別くさて次に何を収めべきやと乗するに、先ず系統体に関するものが可なるべつき、幸に山易の自傳に基しる源之助のの説を附して系統の次に置くことゝす、此の源を佐吉に出て有名なるが幸に山陽うつ人旅四実甫と書き異つてゝる傳説を自家の抱負を更

らん事を考ふる必要あり、されど未だ此を採りたらざるを
もて成書と比照し重複を免るゝあるを以て之れを採
りぬ、

○右の拙著の巻末に山陽の序のある者を
何ぞそも賞えるを例とする心底代弟清朝の詩
話四部を輯めて序跋の人王香園が之れに於て出版し
たる王香園近世叢書二冊を得たり、此れを巻首に山陽
の序を収め次に本篇の序を収めたり、山陽の序は流
石に平凡なる所、第一の叢書も観て宜しく其味
あるべし、本篇の此と共に、山陽の集中にも見へ

ず、或は山陽の遺文を近年輯めたるものなる歟
あるや未だ詳ならざるも遺憾なるべし、且つ〻愛と志
しと遺忘の情とを山陽に寄せ

三月廿二日記

○三十の間に亘り植木屋二人を傭ひ庭樹の手入れやら、蔬菜の
つくり樹を立てやらする間絶えの水垣を修理するやら、秋の
倒れたるも復するやら、茅棚を改造するやらで、少うしも暇の
用がなかつた、庭も一種の趣味にて、家屋の修理も未だ成らぬに
家屋の修理も未だ成らぬに、震災を被れば
みな積りが年中行事になりたるを得たるべし、等漸やくまち
めいて来たので、筆を取つて庭を掃ふ、いつもの習慣

がいつしか復し、さていやなる瓦片の数中刻まれこの程
没して其の一端を地上にあらはしも、みるに不体裁、三日の間
氣がかりして掘り出して見ると、累々山をなす程あるは
震災の名残りである、此の瓦片を拾ひいろ〳〵、フト果
して何ものか、自分を主張を好ひ癖のあるのか、何形の瓦
片がこんなに盛ひあるかと、面白半馬琴がハ犬
傳を書きて、埴を被つて何んうもし死ぬ犬
を容赦もなく迎ひ出して、叩き出しても、犬こそは
情が無つたことをば思ひ浩べて一笑した　三月廿三日
あるす

○賀ひ心る茂丁と云菓子のハ白二種ありて長方角のを「長
生殿」の字が折こみとなりて、外に延寿と形のものあり、全体
初めを素朴のものゆ、方形を縦横の線を畫し、四角形
とし、その中に胡麻を點して一人の田を養ひ、此を形
容し、茂丁の名もこれ船脚したるとの意味なり
菓子通を羊羹ハ「ナニヨナン、ケーキ」と謂へきとこと、
成る程羊羹の観がある、羊羹を製するに可き両側あり
あるがさて各地とも色々の特色を異にしたものがあつて、
一般に等及してある、煎餅の好みどこうもあるが羊羹
ハナニヨナン、ケーキの成る数ふべきもあらう

○外科訓蒙図彙と云へる和本医書あり今を珍重して
好事家に玩ばれつゝあり、序文を見るに明和の年伏見郎
元顕春伯と云へる醫家の家に伝へし古本を上梓したる
なりとあり、金瘡一科の純然たる医書なるのみ、訓蒙
図彙と名をつけたるは北静訓蒙図彙流行ひあり
なるべし名をこれに取りたるのみあらん、巻中医料器械や施
術の元景を図したる和漢式の絵が多く収めて
ある、好事家に珍ばれるまで北の絵かるかられある、
和漢混淆の花鳥家に八景版を愛べき資格を見られ
ず、北時代を西洋にもまぐる外科の施術も印象ひあり

なるべし、この施術の状景を見ると人をして怖れたらしむる
ものがある、自分がこれを見て興味を感ずるのも今日の
施術と絶対文明の相違があるを証するなり、今古の比
較を為すべき北方四方妙資料なるを以て、文化六年
京都錦小路室町の有馬蛭子屋市右衛門と称して出版
され、半紙大の本にあるこ、値三十四匁を呼ぶの相場
也

三月朱雀録

○四十三隻の艦が沈没して、九や五隻を残すのみ、すぐ
引揚げる手段かなく、艦内荒干の乗組員をまぐ出帆
せんとす、先ず刻と花弦に迫つてゐる、実に迫つてゐる有様

がありくとまるう、艦内の人から救ひを求めるのを
電話のお蔭で救ひ得たのである、船体を引揚げ得たら、電話機を
連絡をつけ得たのである、尚艦内の者を救ひ出す
を輸入することもやつて見たいと思ふ、コンナ事を語る
者を思ひも寄らぬことである、ありく、艦内の動
静までありくとまるう、その最後の断末の臨終の
苦まで少しえるとあつても悲惨の極みである、その
朝日の新聞から、左の記事を抜きたり、こゝに収
めおく、

三月廿四日朝

迫り行く呼吸

手に取る様な艦内の混雑

沈没と同時に浮した数艘浮標内にある高電電話が通じたのは四時十分頃で前部の生存者は前部発射管室にゐたらしい、それから後部の生存者の状況は悲惨の極みで艦内には穴見機関兵曹長と小川機関大尉が話し

海上から

らは原田潜水隊司令高塚四十一潜水艦長、土田潜水機関長などが之を聞き取つた、それは次の如くである

衝突と同時に発令所に命令を聞きましたが何等応答がありませぬから電動機を制止して、機関室の者は衝突の音響を聞いて電動室に退去しました、二次電池のくさと同時に艦が左に五十度位傾斜しました、段々浸水して來ます、出來るだけ早く引揚手段を講じて下さい、機関室から水が入つて來ましたから之を防ぐ方法を願む

之に依

ると艦長以下衝突と同時に主水線の排水命令を下す暇もなかつたらしい、艦内の者は皆高い處へ〳〵と上つたらしく、其様子は受話器に能く感受されました、尚艦内の話は次の如く續いた

四時二十七分頃呼吸が苦しくなつた、山に登つてゐるやうであります、瓦斯の爲め呼吸は段々圧迫されて來ました、酸素が次第に減つて炭酸瓦斯が次第に濃くなります

其苦し

い息の音が受話器を通じてありく〳〵聞かれました、又午後四時四十二分頃次の如く聞いた

空氣製造機六個あるから三人で二個の割合に分配して代つて之を吸つてゐる、演習の前に買つて貰つた懐中電燈二個あるがそれも段々弱くなりました、兩舷電動機が浸つた

次に午後五時五十五分頃更に浮船場あらばそれで護衛の方へ曳いて貰ひたい、主水線の排水の用意は爲しあれど発令所の防水扉が開いてないからそれを開かせて下さい

と云つて來たが発令所との聯絡が出來ないので施す手段が無かつた

最後の一句

一絲亂れず 作業を繼續

其處で電動機室に浸水が甚だしければ氣貯室のあるヘルシュー室へ退去するやうに勧めると、穴見兵曹長は之を小川大尉に相談した、其相談の模様が明かに

受話機

に聞こえた、すると小川大尉は自ら電話に掛り苦しさうに『ハハハ』と云ひ乍ら然も言葉は堂々たる句調で兵員靜かに能く命を奉じて努力して居ります、靜かに奏然として部署に着いて居ります、司令官からお上に能く判るやうお傳へを奥々も御願ひ致します、今足が海水に浸りました、少しも早く救出の處置を執つて下さい

室内で

作業してゐる各魂の響聲は絶ねず受話機に響いて來た、午後六時頃『今日中に揚る見込でありますか、唯今何時でか』と訊いて來た、そして既に夜間だと返事をすると『作業の模様が氣にかゝります、今上ではどういふ作業をやつて居りますか』と穴見兵曹長の聲が聞こえた、右に到し海上から救難ブイに送氣管を取りつけやうと潜水夫が入つて居ると答へると『呼吸が苦しいから今氣貯室の

空氣を

ぢりく〳〵出してゐます』と言つたが、それでは氣壓が高くなるからやめた方が宜いと注意すると『それではやめます』と言つた、その傍から天井を頻りに敲く音が聞えた、それは送氣管を取付ける場所を艦外の潜水夫に知らせる爲めであつた、その中に『一人倒れた』『二人倒れた』と報告があり七時三十五分『天皇陛下萬歳』と三唱する聲が聞こえ、八時十五分小川大尉は苦しい息を抑へく〳〵きれ〳〵に然し

明瞭な

聲で

一身上に關しては何も言ふことはない、既に決心して居る、皆様萬一くは邦家の爲め最善の努力を願む

と言葉として申て來た、八時三十八分『天命を待つ』と聞こえ同四十五分『早く〳〵』といふのが聞えると、それが最後であつた、かゝる苦しい間にあつて各自が一絲乱れずその部署に就き上下一致して作業を續け、電話の聲も平素と少しも変らず、一人も私事を喋ずる者のなかつたのは感激に堪へない

○西京の陶工義六が著したる「陶音」と云ふ書を獲し得たるを、中ごろ佐藤公と称して果さず、此書を携へて数ヶ年あり、余の家にクラワンカ茶碗五枚あり、茶人之を「夜叉」の名を与へし、「夜叉」を附す、此者と云く

大政奉還戦後の頃(中略)淀川を船の船夫を乞ひ

を奴隷とする所あり、奴隷一クラワンカ〳〵

コリヤリライサウセと客を罵りて十五銭其他

各種の代物を奴隷に支払ふ、極上等の抹茶碗

を用ひ、今なほ、雅人(茶碗)を以て珍愛す、

有田焼と伊勢の砥部焼とあり、砥部焼の今

をクラワンカ茶碗と云ふて珍愛す

家義の茶碗も砥部焼と思はる、此のクラワン茶碗

の木米の模造品あり

又木米自製の墓と称する此者録する不の板碑左の

如し

木米は陶器を以て自から心して自家の墓を心

り五條坂の上行寺に建つ、此墓は(運命)碑の

寸磯にして形式は六角高さ一尺五六寸木米の

孫吉木幸兵衛は僧の不生中に此墓を取出し

古物商に金拾円にて売渡したりと云ふ

大抵南は神戸を持て行き洋人と交渉して行くと云
説蓑を写ボストンの博物館と花せらるる
人形屋幸右エ門此の人形と唱ふる者の譜あり余も
一個を所持す其頭部は桐にして古く見るに堪ゆ
器用なる造り物のことを物ひ所なりしが此者を
見るに彫像なりと云ふ
人形屋幸右衛門は仇討の演劇に使て有れり
紫花の人形とて真に物を無きものを云ふ也
的流の名人也の一品も無りしものが京都の伏見街道
一ノ橋以南の人形家各所に指て偽造して其商市

貸毒家お福蛭子大黒の数りて新型を以て堂々
八幡杉菓をくすくすと微笑ふ三る年の時をつけはつく
夜庚を変出す能く変れ行くを以て追々と撥心盛
人りて明治十五年頃京都高台大阪伏見大阪
の古物商物産物産商市と交渉す其後各
方面の産の好きなるものと見る一近年は産業
金人が之を買ひ物と思ひ鑑定に物産人あること
仁清窯跡の地に就ては其の行る所あり
現今京都市下京区室町西蛸薬師の奥村延次郎の
不有なかる御室別荘なる京都府管理那花園

村家御室堅町十三番地十四番地十五番地を一円に
別荘とする、其地一円に陶器の破片を掘り出す奥村
氏の元祖へは伝へハ其十四番地か仁清の住居と定む
窯地を定めるに金氏と立合確実なる証拠物無
又の上十四番地の東端部ならし標を陶として建つる
ことを決す
五年前に京都に出むきし節書記者の墓地に木米の墓
あることを探索し石あり、一見して時代を経たる
又ゆらさりしことをあとの建てる墓石なるべし
（青くへきを元
ゆえ　こゝに記しおく）

北坊木米墓の坊に

十

京都に有名なる仁清の偽物の多きことを
ことなるが別して仁清、乾山、木米、御菩薩、清
閑寺等の偽印甚だ多く、今の若い人の先代偽印
の多を蒐集せしことあるし、文化年天保年間
の偽六十個も集まる比較研究の結果
なるより多の偽印の中に多数民所蔵の各偽印（仁清
御菩薩、清閑寺、比良）なるものと
なりしと弘化後まも偽印偽銘多く別度印の多を
辿り鑑定することに難しと云う
陶器ハ多く地名を附して有名、死の名の地名の多ハ

產地なるべく、伊勢を焼といふことき何人も伊勢産を産地と思へるに、伊万里を船積する地なれば、朱元璋本へ有田なり、又梁付と南京梁付と書する）呼びなすものあれども南京とハ清産なり、本邦と南京梁付とハ日本德鎖の產なり、寛文以後南京も長崎船載するかゆゑ也あり、

近年清産に関する版本多く世に出たれど北也堂余が產を得なり其の記する所多くハ自家の實驗を出づるかゆゑ支那都鄙を洞みつくす元清の上ちきなるもんハ、清産を深探して編著

し給ふものと其の選を異にすれ、文章を陶工おろの選又ちう自書挿入あり、是首尾余が要用忘損田是稿の序あり

三月朱雀記

○元禄の脚本集を吾こう早大の出版部に刊行せんとす今る大略お談を述けなり、此の脚本集ハ美術品の校の珍品に係り、五十冊なりとあり、如何も稀獻のものなり殊に所ひう原本の揃ひ所なれ珍らしきことなり、此脚本ハ皆悉其の挿絵あり、世演劇の各者とする外浮世絵の各者なり得べきものなり、えらい和歌の校を拾ひ出ずるに不出とて秘蔵し只学珍重して上版するの意

かりし天保年の大地震に鑑みるもあり、北の天下壮一の脚本
七他日為る義に今もなほ失せ去らんも知れず、複製本
を送り呈するの義かすと雖も決せしも、さて之れを出版
するの力あるものを人の家早大の出版部のおるとも
交渉を要するものなり、早大出版部なるも小家なれば
金を出版するは経験なき仮名あるべく
稀覯のもの(き)共深く考へんと略を決定す、北書の内
近松巡礼十八世あるべんなり人の知る事なるを之れを
除きたるは眼目を失ふ嫌ひあれども之れをかゝ
ることとし、厚き三冊本にして繪画多き

ゆえ、二冊二十円位の値のものとなるべ　三月廿四日記
の前日大雅の刻印を得て幾許もなく亦共茶の刻印
を高らし来る、今度の相面の彩を具す、連中二印
を装置するの褥あ
り、褥二印を装置
すべく四面を
一印を缺く前
日購ひ得たる大雅
の印を即ちぬきし
ある事に装置せん

なるものなり、雷災の時、我と印[illegible]、[illegible]、[illegible]の骨董商
[illegible]を[illegible]印[illegible]を[illegible]と[illegible]を[illegible]と芙蓉印
を検出しなる也、北の二顆の印は故和田維四郎の遺物
[illegible]を聴[illegible]、初めを[illegible]之の四花[illegible]一[illegible]
ことを憶記す、高芙蓉の印を以て十六年敬示
[illegible]の[illegible]印[illegible]なる芙蓉印[illegible]中[illegible]、印[illegible]
八条義[illegible]を記し、北印の[illegible]を鹽田[illegible]と[illegible]、[illegible]
の手[illegible]前の[illegible]と[illegible]、余既に大[illegible]
の印を得、之れを見て[illegible]指[illegible]
時に入る、

三月二十五日

十

○山陽の山幅を高らし来るものなり、中年時多の潮心
松永子登（花廼）の家に寓し別に論文抑揚しなる
也、北條詩山陽の家に行を夜するを集中な
り、仮本黄山の山陽大観に[illegible]ものを絶句
下半（[illegible]）を抜するのみ、今左に抄す

□行雲流水

雨雲遠雲 [illegible]山骨、日氣映射成緑濃、蛟知
老陸詩句如、破墨麥為金碧峯、平生低
[illegible]黄泥洟、徒將糊塗[illegible]拙庸天公手作
南北宋、故弄狡獪戲我儂

義博多子登送至数里途上之所見相似
以為一笑之資　裏口口

前年之風景のみを錦けば行く春迄さらさるの観あり、山陽の家に行くを忘ず、其自注に左の如くあるよし頼藤の鑑定也中のあり、保七郎

子登其余論西陽書南宗故云

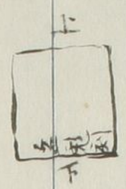
山陽の墨を拓ぶやう子登山陽と親情し、其家に寄せる
こと二十数日及ぶ、数年福岡藩の修献館中の儒者
山陽を慕ふことを聞くことあり、終に山陽を挑
すの詩を物し、訪ふ不孝の徒を門内に留むる八風

数を実すとして放逐せんと擬す、花遊逸早くこれを
採録し山陽を去らしむといふ、北の詩も亦もて天
八惟北風景の南北両宗の致あるを深しらることなく
んとも、事の実あるこうの如きも思ふ、園藩皆
北宗を問ず花遊の如きは同好の南宗なり、南北両宗
の萬蔭若んぞ戰ふ一笑すべしと時を其陰の境
遇を言ふに寓しなるあるまじやも想ふ、

○豆帖一冊を責りて来るあり寸八帖屋の定紙にて山
巻首に立入の題印あり曰く「蓋古洗風」次に立入と書あり
巻尾に富士嶽の高の白雪出あり外に紙面の山形あり

他を抵抗を入つての盧書を立入の題後に八十五史と
あり、此帖の時代凡を知るべし勝を第十と云く三月廿
五日也

○印の鈕に落款を切るの法につき氣のつき易き一事あり材
の住るるの後人磨して改刻することあるを除外とする可し
改刻の際刻者の名の存するい往々異を為すい故に改刻
とせこ名を同時と麗しくんとするを落款を刻する
の位地は左の如くする外に道なし、如斯き刻者の用意あり



は適路の意もどこにとるべきのめき奥あるを志
き心地なるを、今日獲り芙蓉の竹吟石默の印

材を指鈕を刻す度毎に住財を、而して義款圓の如く
切り来り往年四辛一説の時、義款餘を片寄りるきの感
をなせしが今思へは材を場もて改刻の時印面とせこ麗しく
らしめん用意を特に緣色にて刻しけりと思いるこの仕方
も文邪を例のあることなれ、現に余の孫義に係る劉完
白の楕圓印（真の一字を刻す）も実強同し位地に刻しあ
りてこれも住材をことを思へ、材を對する意（意をこと云
へ）なり、全体高芙蓉を多くの場合疑を切らす、家義
四五の印皆義款を缺く、世方偽いるものを鑑れ芙蓉を
まるを多く義款あるい表し稀に、これも通路の寓意

あらん、名子切つて北北き用心あつて拍子を抵抗上頭に義
歌を切る事多し、之れの為の他の改刻のとき瑕疵を防
する時紀り、印人の留意を要するなり、偶に感する
所なり、ここに記す

三月朱書録

○郷里紙後の方面迄の内義時雪門下の俳人多く多年
が多行する俳諧雑誌「雪」に御弁の松の俳句を載せる
一婦人が婦人と迄の半ぎりを船の代へ陸上の俳を便
り海上を溝（きみぞ）[illegible]するを例とし一般風意光
燈滅し方向に迷（まよ）[illegible]機死しとり[illegible]りとなるが
北の俳句マンスの大意なり、本年の首（あたま）ひな

際（きわ）もこれと共に同一の俳句を聴きなり、久張女の方
から半ぎりの乗り俳を用ひ海を渡り婦人と名し
なるこれも終に悲俳の最後を遂げ也、唯だ異な
る初島も熱海（あたみ）迄ひとりとなることなり子の名の
異なること、日南の燈が或る[illegible]候所の[illegible]てさと
位地を意一致きなる為め紀（ちなみ）を[illegible]塔の最後を遂げけりと
云ふ丈が迄ふの[illegible]本体俳節も意[illegible]と[illegible]不可
舟の代る半ぎりを用ひ[illegible]ひとりとなるまで同じきは
宰子奇と云べし、全体海色の俳句を変へと共
通点を云を得べく、一所に俳句を多く他の

戀の奥津城（お辨の松）

種岡橋畔

（一）

米山の山脚海に迫りて、錯雜參差、北海の波濤は常にこれと衝撃して怒號の聲を絶たず。幾百年幾千年の間山と海との戰ひは常に繼續せられて山膚爲めに露はれ、此處に一巖の欹つあれば彼處に奇礁の亂立するあり或は神削せられて、千仞の巖壁となり、鬼刻せられて數丈の洞穴となる、昔は米山三里と稱せられて、北陸往還の最大難所をなし、旅客は此處の嶺、彼處の巖角に僅に一條の鳥徑を求めて往來せしものなりき、されども開けゆく世の潮は、此岩角もせき止むるに由なかりけん、今やたゞ數箇の隧道に峻險の面影を殘して、一條の鐵路平かに築かれぬ。旅客は車窓に依りて、巖に飛び散る潮の花を賞し、青波の上に舞ふ白鷗を指點して、其絶景を語るに過ぎざるべきも、誰か轉じて他の車窓より、懸崖の中腹に危くも根を固めて、强き潮風に吹き撓められつゝ立てる、數株の松に眼を注ぎて昔を忍ぶものあるべき、あはれ安んぞ知らむ此松こそは、熱き戀の血潮にうら若き身を燒き盡したる處女お辨が戀の奥津城ならんとは。

（二）

松は笠島と稱する小き古驛の外に立てるなり。古驛！實に笠島は敗殘の影あはれなる一古驛なり。笠島海苔の名によりて、僅に人の記憶を去らざるも鐵路往復の旅客にして、時々海草採る海女の可笑しき姿に眼止まる外、笠島の所在をさへ餘所に見過すもの多かるべし。されど笠島は流石に絶勝の地なり。巖のたゞずまひ面白きは言はずとも、波の響きのいみじきはたゝへずとも、遠く煙波の彼方翠黛の如く浮べる佐渡の島根の眺め如何に優しきことよ。

お辨は此佐渡に生立ちし若き海女の一人なりき。何時の頃よりなりけん、彼女は笠島なる若き男――名は傳はらず――を戀そめぬ。名にし負ふ北の荒海を隔てたる戀なれば、彼女はたゞ岸に立ちて朝日の出づる彼方の國は我が戀しき人の住家よと幾度か憧憬の涙を流しを向けんやうなきを、まして高き燈臺の上には如何で笠島なる若き男も亦戀ふる心は君に變らじものをと心なの海よと、夕日沈む彼方の空に想ひを馳せぬ。かくして二人は障り多き戀に熱き涙を注ぐなりき。

（三）

されどかゝる便なき戀は彼女の忍ぶ能はざる所なりきよしや荒波に命を失ふことありとも、戀しき我が夫の手を握らで何の甲斐かあらん。優しき君が腕に抱かれずば何かせんとは常に彼女の念頭を去らざる願なりき。かくて彼女は大膽にもたゞ一人荒浪越にて、戀人住める笠島へ通はんと思ひ定めぬ。されど人目を包む我等が戀なるものを、口善惡なき里人に噂せられん事の如何に口惜からまし。彼女の小き胸に蟠まる悶にはこれなりき。幾度か思ひ煩ひし末、夜更け人定まり、沖に漁船の影も稀なる頃、密に家を出でゝ戀人の許に至り、朝まだ早く人々の褥を離れぬ頃に再び己が家に歸り來らん。よしや逢瀬は短くとも、逢はで忍ぶには勝るべきをと心に決しぬ。彼女は密かに海を渡る用意を急ぎぬ、小さき盥、小さき櫂、かくして彼女は夜の更くるを待ち詫びたりき。

（四）

夜は次第に深うなり行きぬ。機もよしと、彼女は踏むり。

足許のさゝやかなる軋りにも胸轟かせつゝ密かに家を拔け出でたりき。仰げば空よく晴れて、群星恰も眞珠を鏤めたらんが如し。彼女は兩の手に小さき盥小さき擢を抱きて、たゞ一人波打際に立てるなりき。風全く死してそよとの音だにせぬ眞夜中にたゞ聞ゆるものとては、我が足許に寄せては返す波のさゞめきと、近くの森に啼く梟の聲とのみ。常ならばかよわき處女の耳に魔の寄する聲とも聞きなされんものを、君に遇はんと願へる心の前には、返つて進行の曲とも聞きなされて、無限の喜悅の湧き來るを禁ずる能はざりき。されど靜に立てる彼女の眉には、言ひ知れぬ憂ひの雲の漂ふを覺にぬ。其の眼は遠く何者をか求めんとして止まざりき。彼女は正に米山の姿を求めんと焦慮せるなりき。戀しき君が住家は彼の麓よと、朝に夕に憧憬の眼注ぎたりし米山の姿を！。

されど朦朧として、空も海も一つに包める夜の霧は、遠き越後の山々を蔽ひ隱して、米山の姿はそれとも見わかず。彼女は何を目標に舵を定めんかと小さき吐息は幾度か其口を洩れぬ。されど暫くにして、彼女の顏には喜びの色漲りぬ。其眼には希望の光輝きぬ。見よ、彼女の凝視しつゝある海の彼方を、そこには微にいと微に、暗に點ぜられし線香の光よりも、なほ果敢なげなる一點の火光あるを。彼女は思はず口走りぬ。

『たゝ、それよ、彼の光こそは我が君が常に語り給ひし、番神崎の燈臺ならまし。我が君の住家は彼の光より稍や右に當れるを』とやがて彼女の小さき盥は、辷るが如く海に浮びぬ。

（五）

小さき燈は安らかに彼女を導きて盥は笠島に着きぬ。同じ思の戀人は喜んで彼を迎へぬ。そも彼等が語りし事は何、彼等が囁きし事は何、靜寂の夜の天地は、永しへに二人の爲めに樂土とそ思はれぬ。夜は漸う明け近うなり行きぬ。人目に觸れなば又遇ふ時の障とならん。名殘は盡きねど、又來ん夜をと約して、彼女は再び盥の人となりぬ。鉛の如き夜の海に、漕ぎ行く櫂の先のみぞ白う閃く、彼女は幾度か漕ぐ手を止めて後を見返りぬ、君も流石に名殘の惜しまれてにや、諸手を高く擧げて何事をか語らんとするが如し。盥は次第に沖へ〳〵と漂へぬ、顧みれば蒼茫として君が姿はすでに見わず、只番神崎の灯のみぞ著しく我が目を射る。彼女は靜かに立ちて、兩手を合せつゝ頂垂れぬ。「たゝ此燈よ。又來ん夜も光を改めて我を導き給へかし。」

默禱數時、頭を擧ぐれば、燈臺の灯は更に明かに彼の眼に映じぬ。

（六）

かくして毎夜彼女は番神の燈をしるべとして笠島に通ひぬ。世は漸う秋になり行きて櫂漕ぐ袖に濕りを覺に仰げば空に銀河白う流る。夜は益々長うして戀を囁くに相應しうなりぬ、されど北の海の習、此の頃より次第に浪荒くなり行きぬ、風面を打たぬ靜寂の夜も、浪の底には恐ろしき力の漲りて、潮騷の響き何處よりともなう耳朶を襲ひぬ。さは言へ、戀ふる心には何の障碍もあらざりき。彼女は一夜も笠島に通ふを止めざりき。風荒き夜も、浪高き夜も。

秋も稍深き或夜、まだ暮れぬ先より黑雲空を飛ぶこと矢よりも早く、風は次第にふき募りて、樹枝を折り屋根を飛ばし、海には白波重疊して、日の暮るゝと共に益々烈しく、常には浪の上は疊の上より心安しなど、語り合へる若き漁夫も、今日のみは言葉もなくて、たゞ己が船の纜（ともづな）固う結ぶに急がはしく世は如何になり行くにやと、人々安き心もなし。かく荒れまさる夜は沖に漁る船は一つもあるまじ。一歩外に出づるさへ面を向けんやうなきを、まして高き燈臺の上には如何で登られん、今宵は燈臺の燈なくとも、誰か困まんと番神の燈臺守は窓固う鎖して、燈點ぜんともせざりき。

（七）

佐渡の海も夜の更くるにつれて浪益々高し。されど彼女には荒き風も高き浪もあらざりき。『笠島へ笠島へ』と心は一向に急ぎぬ。誰一人汀に下り立てば、ふく風にはためきて、袖も裾も千切り去られんとするが如く小石交りの砂は脛を打ちて、肌も破れんかと思ふばかりなり。番神の灯をと暫く立ち盡したれども、遂に求むる能はざりき、彼女は獨り心に首肯きぬ。かゝる雲深き夜のよしゝ燈は點ぜられたりとも、如何で見るを得べき。番神の崎は彼のあたりなるものをと、小さき盥を波間に乘り入れぬ、盥は風浪に翻弄せられて覆へらんとせし事も幾度か、彼女は渾身の力を盡して、たゞ番神の燈を見付けんと漕ぎぬ。漕げども漕げども番神の燈は見出す能はざりき。彼女は遂に絶望しぬ。かゝる風浪に終夜翻弄せられたる身の、今は果して何處の沖にか漂ふらん。あゝ彼の君は眠らで我を待ちつゝあらんものをと、彼女は盥の中に倒れて泣きぬ、腕はすでに綿の如く勞れて、櫂を握らんとする力だになく、今はたゞ身を風浪に任せて漂流せんのみと決心したり。

足許のさゝやかなる軒りにも胸轟かせつゝ密かに家を
笠島なる若き男は終夜海岸に立ちて彼女の來るを待ち
侘たりき。時移り夜更くるにつれて、風のみふきまさ
りて彼女の姿は遂に見ゆ。あゝさては我を思ふ心も
此風浪には勝つ能はざりしか、我が斯く待つをは知ら
でかと、聲を擧げんばかりに嘆きぬ。
夜は次第に明け行きて、風やゝ凪ぎぬ。折から浪に搖
られつゝ磯邊に近寄り來る者あり、注視すれば青白き
腕、海草の如く亂れたる髪、女ならずや。彼は我が身
の濡るゝをも忘れて、磯邊に引き寄せぬ。俯向きし顏
を一目見し彼れは、昏倒せんとして僅に止まりぬ。た
ゝた辨ならずや。我が戀人ならずや。彼れは冷き戀人
を双手に抱きて聲を擧げて泣きぬ。亂れし髪は心ある
が如く彼が腕を捲きぬ。

(八)

可憐なる戀の犧牲者に辨はかくして逝きぬ。彼女は死
してなほ其戀人を尋ぬるを忘れざりき。憐は知らぬ里
人もた辨の此の優しき戀には流石に心動かされたりけ
の記念にとて植ゑし數株の松。春風秋雨幾星霜、今猶
ほ翠綠の色を改めずして、た辨の松の名と共に、道行
く人に多恨の涙を灑がしむるを優しき。

いと微に、暗に點ぜられし線香の光よりも、なほ果敢

當季雜詠

津山正雪選

枇杷咲くや賣りものとある古瓦　新潟　白蛾
啄木鳥や注連張し木をよそにして　同
燒け殘る土藏の上や寒の月　同
藥砧小夜更けて聞く雨の音　中頸城　一峰
土堀れば蛙の出たる時雨かな　同
時雨るゝや仁王門深く鳩の群　同　峰雪
墓原に二つゐて鳴く梟かな　同　曲水
前垂に肼の手拭いて厨より
湯上りの肼うづ痒き夜なりけり
肼藥しまひてありぬた針箱
啄木鳥の且つ鳴きつゝく枯木かな
寒林に轟く雷の一つかな
除夜の鐘亡き子等偲ぶ身にそ入む
硝子戸に吹雪凍つく眞晝かな
は火事の灰降る雪の小橋かな
[illegible]口に高鳴く鷄や初日影

○漢方醫家櫟蔭（伯氏廉文）に醫勝三冊の若干文
化年間に刊行せらる、醫家の隨筆なり、中に花府解
劑の一節あり、支那に早く解劑を行ひし事実と端
書を抄出するなり那の卷攷に資するなり乃
ち左に抄出す

解劑花府

朱載堉律呂新說云、岐伯曰、夫八尺之士、皮肉在外可
度量切循而得之、其死可解剖而視之、蓋太古時風俗
淳朴、死則棄之於野、初無衣衾棺槨之葬、故使醫術

者可得剖而視之、六無所禁、後世聖人、取諸太過之象、
始制衣裳、由是之後、回有殘毀屍體之禁、無敢剖
而視之者、以此推之、知彼醫經其來之遠、又矣止於三
代而已、此說非也、趙世昌寅退錄云、廣西戰歐希範
及其黨、凡二百、剖出十有六腹、宜州推官靈間、皆詳
視之、為回以傳于世、王莽誅翟義之黨、使太醫尚方
典巧屠、共剖剖之、量度五臟、以竹筵導其脈知所
終始、云可以治病、然其說今不傳、又晁公武郡齋讀
書志載有真回一卷、皇朝楊文編、崇寧間、泗州
刑賊於市、郡守李弘行遣醫并畫工往視、決膜

橋膏肓、曲折回之、盡得纖悉、以校以古書、無少異者、
此政希範五花回、是之遠矣、實有益醫家也、又聞見
後錄、載無為軍醫張濟能解人、而視其經絡、則無
不精、因歲飢疫、人相食、凡視二百七十人、以行針無不
立驗、按明程式亦嘗解倭人、換視臟腑、詳見其醫
穀中、近世斯邦醫家、亦好剖解、驗以荷蘭內
景書、頗極精微、然有益於外科、而無裨於內
科矣、

○此廿五日本邦の地球器と韓版東醫寶鑑廿五冊を燈
下、北書に支那醫方書の最後にあるものと韓國盛時

嘉慶五年刊

其の獨創の醫方を録したるもの及び漢方の四大家の行はるゝ當時杏林の玉條と称せらるゝこの書、本邦に於ては学者及び其の研究者あり、医学の歴史上北書の重きハ今も古と異なるなし、但し漢方療法を解きたるもの及故と称せらるゝ方かゝるこの書を顧みるべし、為めに和漢の四書を今日求めて得可き人や稀なり、本書のごとき他の類なく大いに珍とするの日あらん、余醫書に趣味を有せざれど禁中多く韓医を召し、之れを代表せんと

三月廿六日記

と購ひ入る價三十五円也

○人の資質を視てあり人ハ神経質に多血性に頑固性に

の何人も之あることあるが、西洋も早く此事を研究して

具体的の之をなす、或ハ四質を今ち或ハ六質と分つてゐ

る、その四質と分つてゐるのを一に曰く多血質二に曰く粘

液質三に曰く胆汁質四に云く黒胆汁質六に分つて

ゐるのを以上の外に神経質と強健質の二を数

へてゐる、リゼランドと云ふ人ハ六質論者にあるも

而して四質論者ハ神経質ハ常に多く高

體に著る一定してあるから別に、亦強健質ハ

多血質中の変体なる）きぬ、うち一類とするなるべし
と云へるなり、概して神経質は必ず虚弱体と
見る可し、然れども、多血質や胆汁質
や黒胆汁質等の体ふ一類なるから一類と見ぬ方
かよいか、先角四質分類は通例とうもみる
コンナ分類も相学者などの領域に属するもの、故
なるが、医学と連絡のあるのも論もあるまじ、然る
病質者は病者といふべきか、其の云しいうとすると、
治療を要することもあるべし、醫家との交渉が生ず
るのである、醫家も病者を治するに先ず心得

亘ぬいうる如く、偶々あ改正
出版された廣瀬氏目の三才雑雑といふ河茶陀主
説の譯本を見る、中に四質論一篇があり大略
を挙げもある、所謂四質の概略を述べたものなり
一、多血質　其形貌、顔面あかく、玫瑰の花の如し
身体のうちに体無しと不足なく、富貴の
硬軟宜きを得て肥満し、相い温柔なり
身の長高からず、毛髪黄い細くして
稀少、而色い淡白、或い黄、手足の筋骨軟

捷うして甚速うんと度を速くする
事を嗜むべし、さて●気を後の神経
爽快にして、神経の受ける活潑なる感動
し易く思慮強くして動揺し易し、記臆力を
強力にして強く、物に触れて忘却し易き解
散すること易し、敏くして性急なる
人の血液いと濃厚にして運行速かにして、総て
精慢にして●なる者の固有性質
此の人血液也

二　粘液質　此質の者は常に怠惰なる人

十

心情慢性の者にして天稟鈍敏の才なく、
思慮事に粘着して速に決せず、記臆
堅力にして、心神定まり難く特に●基微
押りすれば是既に疑惑、始めて睡眠を含む
赤恐怖し易し、此質の人の体中の血液多
量にして液過量、其運行遅緩なるを以て
活物の運動も亦遅慢なり、故に血液多
量なる故を以て或いは多血質と云、大体
此質の人脂肪多くして肥満し皮膚滑潤
軟柔にして脆し脆を摩擦、後に、総て温

地うて池沢多く或ハ温霧深き地方ハ住す
るものハ北陸の人多し、菜蔬多く晩の
水流を嗜好するものハ北陸の人多くあ
り

三 膳汁質　此質のものハ身体の構成堅固強
うて纖維強硬、體肥大なるハ常晩
固形部ハ心用ハ活動部のものハ筋肉
毛髮ハ勢義なるハ深黑且つ太し、眼目炯々
たるハ気を放ち、脈動ハ強硬なり、食欲ハ強
くして、多食するも能く消化し、膳汁の如き

ハ通ハ速なり、身体性質の運営活潑なり
容易に変化せず、能く熱帯し、思慮活潑
心思堅剛、七情の発動劇烈なり屈撓す
ることなく、よく念慮を動し、かゝる丈氣質人
の名あり、概して驕慢なり貪欲なり、動人と
共の親と共に度量を感ず、一抜子を
合るときハ他を顧みず一意遂行を所す
肉食男酒の人と北陸多くあり

四 黒膳汁質　ハ一二頃国質を兼ね北陸の
者老人婦人殊に壮年者筆工等の如く

體軀の運動常に靜にして年月を積むに
固有性なり、此時の如きの葉と心思と
漸々に勢力し其芽葉を獻ずること
為すに程遠きこと遠く拙を極むるなり
養こと能はざるものあり心中常に鎮靜なる
ときは花雖を拙んず人を軽侮して練達を
用ひず、能く苦患を拙く、怒罵して
臨めば花雖を廢けず、性々自負の為め
まるを以つことあり、性頑固にして拙の為
めに動かず、一切思念ときい之れを解く能

はず、知のみ能く大能鋭く智慮深きものあり
此時のものは拙し拙し躁躁骨立して皮膚へ
乾燥し性節強且頑固にして、睡眠へ
常多く、容貌熟睡するもの如く、眼
窠凹み常に怒に沈み度慢なるもの
なし、此時のものは極熱の地方に多し、又常に
粗大硬固の物を食する人に多し、
之れ四時の概略なり、大体四人を此の四時の何れに属
す、但し往々二時三時の混合するものもあり複雑
を以ても四時を原則とすることを得べし、友人塙西方

遠い北を見ることあるが、往年各藩の選抜者を
臨席の北の四隅を例の所作をなして説き一坐に異
異へしことあり、等しく北の四
隅の何れも議論するに本を以て各自黙
考式は大去の籤を得ることなく或は大吉の
籤を得ることなく或は凶を得ることあり情況を異にするも無理
なき結論に多数の人を一挙して批評するの一法
とも云へべし、遠近は北の四隅の何れに属するやと
云へは本四籤に属し余りは本三種に属するもの
の

三月廿六日記

○文部と醫術の用ゐと人體を象りたる銅像のあることは
ハ法と銅人の二字あるを知るこれを軍に人体の
外部を象りたるものなり、腧穴腑臓まで具足し
たることなれ精巧なること、唯此代に
既に絶なることなく、此代に偽とい異なり、此代に
国のもの、その初めを之れを心りとなる
代なりしことは確なり、本朝醫家の伝れ心竹田
の室洪武中に入て銅人を得たることあり、これは
明廣の火災の燃失せるよし、之れの伝れは明代に
もあるべし、如此本邦に一伝を輸入したるなり

ゝ、西洋にては今人骨模型あり極めて精を尽す
もの多し、此銅人も亦と同じきもの也、係し支那人花
七八寸にして鍼灸の研究に用ひたるに似たり、鍼灸
銅像と云ふを多く鍼灸の二字を冠らするの例なり、
如何なる構造のものなりしか、今詳らかに知るよしもなし
けれども脈絡ならびに五臓などを画し得る様なりし
りたりしかは如しと鍼灸の[illegible]所などを穴數を
穿ちたるを示したるらしく、今醫勝に載せる考証
に就て二三を抄録す

周慈齊東野語曰、曾嶷試鍼銅人金像、以精銅為之、腑
臟無一不具、其外命穴、則鏤金書穴名于之旁、背面
二器相合、則渾然全身、蓋四都用此以試醫者、其
法外塗黄蠟、中實以汞、俾醫工以針按穴
試針、中穴則鍼入而汞出、稍差則鍼不可入矣、亦
奇巧之器也

えすきの構造の大略を推し得べし、醫勝の注に
四都とあるは宋の故都汴梁とあり、宋代の銅人の大略
とそなるべき歟、而して之れを鍼灸の術を試むるの用に供し
なるは左の記事にて知らる

裏物日、曾嶷試鍼銅人金像、以精銅為之、腑
臟無一不具、其外命穴、則鏤金書穴名于之旁、背面
二器相合、則渾然全身、蓋四都用此以試醫者、其
法外塗黄蠟、中實以汞、俾醫工以針按穴
試針、中穴則鍼入而汞出、稍差則鍼不可入矣、亦
奇巧之器也

太醫從古銅人、宋元遺物、依明堂孔穴、鑄竅以驗鍼師、宣德時、江南凌雲、高漢章、鑄神鍼、宣宗召試大醫院、糊銅人孔竅、試之、凌雲七十二鍼無遺、穴乃補御醫、彭孫貽客舍偶談

宋元時、修銅人、代修補、とあること、左の記事

吳長元宸垣識略曰、三皇廟內、有鍼灸經石刻、元元貞初、紫、其碑之題額、則宋仁宗御書、至元間自汴移至北者、而上陵署有古銅人、盛中注水、閉竅畢達、古色蒼翠、蘚潤財因、相傳從汴中湧

出者、按銅人像、生藏象、二廟神像者、作于宋天聖時、元至元間修之、明英宗時又修之、云々

元史の藝文志、名工を誠ちる、銅人の修補を命ずる記事あり

中統中、尼波羅國人、阿尼哥從帝師入見、帝問何所能、對曰、臣以心為師、與知畫塑鑄金之藝、帝命取明堂鍼灸銅像示之、曰、北指撫玉機、使宋時所造、歲久敝壞、無能修完之者、汝能新之乎、對曰、臣願未嘗為北、試之、至元二年、新像成、閔鬲脈絡腑俞、金工嘆其天巧、莫不愧服

銅人宋朝ゟ出来ること左の記ゟ明かゟ ここの迄補す

○天聖中、詔以鍼灸之法、鑄為銅人式、鄭振文略

○天聖鍼經、五年十月壬辰、醫官院上所鑄腧穴銅人式二、詔一置醫官院、一置大相国寺仁濟殿 王応麟玉海

○人間の體質風土ゟ おのづゟ相異あゟ藥劑又風土ゟ劑酌を要す、左の一話ハ醫賸ゟ載する所ゟ土氣を藥ゟ加味する理ゟ於て可ゟと謂へし、洋人ゟ適する藥の分量邦人ゟ劑酌加減を要すること勿論ちゟん

天明壬寅歳浪華船商十数人、鄂泛到移の地、留月餘、其内一人染時疾、縣司差醫日就診、醫不自調藥、唯疏其方而去、衛卒乃授方藥、買之藥鋪、而其藥藥、將鉄、莖十餘本、檳榔、収土、投諸水中、攪澄用之、曰、鉄莖、從日本所儀来、株猶帶其地土、今用此物、猶用其土、必無不服和土之遠也、蓋其用心切矣、

三月廿七日記

民風作興欄

五百年經てば火の鳥となつて死し 更生する靈鳥

近く東京牛込東五軒町市島春城大人の宅を訪ねた人の話に、この三幅の軸ものは大人の手によつて客の前へ展ぜられた、見るとそれはこは珍しや坪内逍遙博士の手に成つたもので一幅には柿の木かたんかと認かれてあり他の一幅には今春高田半峰、市島春城兩大人が坪内博士の熟海の別墅を訪ふ時の賜ものとて高田、坪内、市島三大人の似顔から肖像が畫かれてあつて桃源郷もどきの三大人談笑謂ばれかなにかゞこれも坪内博士の輕快の筆にて書きつけられてあるしかしこの二幅についてはこゝにこれ以上云はんとするのではない只殘りの一幅これには鳳凰にも等しき一羽の鳥が畫かれ題してヒニツク（比尼芝）と命名されてある、このヒニツク鳥はアラビヤの靈鳥で不思議の運命を持つてゐるなんでもこの鳥五百年を經つと身體中火になつて火の鳥と化しその儘命を落してしまうが火に燒かれて死ぬると同時再び健全な鳥と生れて來るよつてこの鳥を佛して更生の鳥とも名つけてゐるとのことだ五百年の壽を保つたところで火となつて一片の灰燼となり再び生れ代つて鳥となるこゝに帝都復興の意味が寫せられて居るとて春城大人は例の話上手に語るのであつたとのことだ

○中川柳外こ詩畫をもとめ
寸帳二揮毫成り今朝到来
柳外詩畫共こ遠者また一枝
の梅あり、今たゝ四五の紅を
ひらく

楊柳絲千條、美池遊子光
江南春景動、古閣酒家旗
雲起度山肥、蒸蒸桂樹

十

活、飛瀑不知處、臺影來排蓮
雲木暮花光、夢象因一色、道人菊數心、住在
水墨圖、
秋深楓樹丹、雨霽江流碧、天地一孤舟、悠哉
毛鈎客
萬重峯巒山、千里蒼茫天、造化大粉本、收入
夏眼裏
牡丹自光妍、胭脂不足論、三升臺洪濤、欲奪
化工產
雜、遊谷蘭、長恬梦、蝶國、不知王者香、鹿

懸美人色

八情皆白菊、詩憶劉夢得、清秋我欲尋、東方菊華白

投彩清思生、崖窠亦仙客、雲裏雲烟冊

神游巡空月、

北面冊帙に置しと曾祖雪舟とおすを最後畫伯の句に取るも

三月朱八日記

○名古屋で江戸軟派研究とあるが小說俗を刊行してある陽明文庫ハ二十枚のあるを俗畫集を發行せんとして荒木の賞を募つたのゝ新し自分も俗畫の初めてらサ

ブスクラーバーとあるが、今日芳の畫集の紹介を得た。

ロメイの收無彩色で今古海世俗大家の姓名を二十家二十種を選んでゐる、解說の卷首を書遠かあるを俗の說を陳べてゐる、古遠ハあるを俗を狹義に解してゐるゝ及し、北集を廣義の繪とゝ方で、北斎本住春貫の數多る掠を俗も交つてゐる、全体あるを俗ハ多名のことく、雖も桃芳水 傑といい所を畫し比俗ひあるを、一歩進めば恥部があるんもするを傑といい、元ひあるを俗とゝふ名も起つたのである、畫者の本意を何のあるせよ、聯想から性慾を桃芳することハ免れ得ぬ、元ひまひか春貫とんそど

まぢかあぶる後ひあるか、廣義狭義と云て、劇場の引き方は事実を拵て困難ひある、係し餘韻ひ聯想せしむまひが、あぶる後ひ、美を通り胸もとはあぶる後ひはちはと異ハ解する、婦人が白肌をあらはしもつる美上の○寝具を副くれり、紙を口をくはひさせなりしてはもちや春書の域へ入るのひある、全体あぶる後の初まりハ婦人の不用意の態度をあらはしたこの自然の美があるとしたものかもの人が殷々春書的傾向が多かりつる事て餘韻ハ美丈為らき、聯想の餘地が多無ハ極まる事ハ、そうなることあぶる後を通り越しひたことなるのひある、流後の美人衣類を整ふいとまなく肌膚を露

いしてある図や、ハ紀を抱ひて胸部あらはに乳とあらはしてある図や、風を聊団部の衣を翻して肌をちらはしたる図や、流後ひ乱れたる肌膚をあらはしたる鏡を執りたる図や、蚊帳の裏を胸部聊部をあらはしたる寝たる図や、変化の振りのぎれ髪を掻つりたる図や、清流に宜きを涼量に為聊をあらはしたる足をひやしたる図や、潮干に為聊あらはを鮑貝を採る図人無き所に衣換をする図等ハ、自然の態ひ春畫味が無い、又後絵もある、京地住ひあぶる為味もあるのひあるが、畫家ハ如色家の○阿彌ハ、業を先道に留めず、何事うのしものを貶綴する、その貶綴しひこの○

が端なく春画化する場合があるとして、前に挙げた図柄に就て考へたが、此処に就を導くとする図は男子を配したる敵帖の内のひとり掛の女と一個以上の枕のあつらへ、もろ肌ぬきの現製の婦人の背後に男子がみとめられ、もしや春画味がかんじて来る、屋根船の窓から女が雪白の手を差入れて洗ふ図、また屋根船が陸と何等かの子を聯想せしめる洗人や紙をくはへさせるの格は春画である、海女と裸体の男女の抱擁するのも自然春画である、浴室を覗するとおうくうして来る、女の浴室に男を没しもする図を見れば、窓から男子がのぞき抱るは春画味がさして来る、此の挿絵の内まで春画もそるべきものがいくらのある、鏡面に映した婦人の顔に男子が接吻する玉山雲母の相貌ひあるは、あひびき、行燈、などは春画である、どうせあぶる絵を聯想する性質をそこなはしめる淡泡なる恋のあぶる絵の本領がなくて淡泡なんば春画の域に入ると迄別する外に仕方がない、地震に狼狽した裸体の女が道に迷る図などを通過してあぶる絵と解する説もあるが、情味が斯くかはつてもあぶる絵といふ言葉は雖いと思ふ、風にスリが捲くれても抗力の結果で数人同しとなるもなんの人が、こんなる人の快感を剥奪するなの情味がない、

盆踊の時の衣類を剥きたるまゝ裸体の婦人と
同じくあぶらをぬりたくんと思ふ、道理は日本の衣服
の風習容易の肌露があらんやすいあぶらを者
くるまと日本と固有の便利があるとは同感なれども、四ある時
代の実生活の風俗を写生したものゝ如くでなければならぬとの
ヒユモラスん無けれバならぬと云ふ故に同派するのを絶対
狭義と解しなくるの感が強く、肌露きの露いし方が
殊さらしいのを挑戦暗示を為くなるが為めに
画家の眼の独り故びある、画の巧拙ハ別問題とせず
ばならぬ、道理の言ふことく取捨を為すもあるも

絵として及第するものをいひくらるひあらう　三月廿八日

太郎ーより写真出版者も禁止を言ひ出すとの
内報あり、乃ち禁止の原因を鏡面をうつる婦人の顔、
あいびき、茶碗樹の間とおもふ、右を春雪と
ひきこもあり、他の十七枚を一旦版本（書物）として海
市しかし海布ーつあるこのこと

○抗味の粉山湯を漸や粉末状にして印刷に附もし試
みの整理して日録と心つて見んハ、海苔を為さいる欲
隔二三日にして止まるべ、あこの風邪の気味を引の成中
西行書き　述　たの十　項北低数約十二行界紙百
数

更に蕪補足を要するもの若干あり（四月一日）

一 山陽と印式并用印
一 山陽の二方面
一 博多を通ぜんとした海の話
一 山陽の遺影
一 有栖川家に出入の動機
一 山陽の書と乳母
一 菊池村の乳母一本やら
一 山陽とその山陽
一 東山の俗謡
一 茶山の為めに梅半郎の歌を書き一遺憾を言ふの所存
一 日本外史復讐物
一 山陽と彫山
一 山陽の演劇趣味
一 山陽と稼堂
一 山陽最後の望を達せず一大概なるも無き漢文大槍

十

○北印三顆京都の割烹屋を煩はしたる人物

来り示す、マンザラ賢低なる思のんず、西京の料理屋あり、主人春葉氏なるものとは維新毎々の新ありそうなることを思ふ

四月一日記

○山陽の遺ふを白隅とせき足し高大塩中斎と山陽の一項十枚、唐絵彩選（紙）紙五六枚の行を嚮ず、雪敬乗中得る一二の図書を紹介する左の如

一 解氏芸乎　二冊

寛保元年京都に刊行の也び、支那僧雲操
通慧の高僧伝を輯録したるもの、将義氏
の校訂を経たる、北書も稀本也

一 甘雨亭叢書　薄墨本　一帙　六冊

此書叢多く所収と雖も故に架中
之を缺きしが、薄墨本は常とする所
以なり特に入る、北書の薄墨本と稱
し他の傍の善本の倍以上なり

四月四日記

十

一 古方薬品攷　五冊

天保年間京師の人、加藤園の著す所、本
草学、金石学にあらず本草色を主とせんも
未だ定まらず、北書の特徴とすべき八、輝図
約百五十、皆当時西界の名家、嘱して
画かせたるもの、往々一家数図を出すも
亡きもの大体一家一図にて、一部当時名流
の書画をもて見ることを得べし、其知れの
西家を録すれば左の如し

在京　永岳　猪田　岸良

為恭　在宸　光学　梅逸　清暉
永信　將愛　豊彦　連山　義亮　海保
月峯　文麟　岸岱　暢堂　春琴
微山　一百年

方今北方の孫とせらるゝハ、ずバ揮毫に、あり、候

二十九日記　四月六日記

○山陽録の原稿前の（四月一日の項参照）以来更らに書き足しなるもの、大阪中西と山陽」の一項、元を山陽と中西の尾張に行くを送るの序を中心として説を加へ、「虞絶彩

遂」と、詩律論」二項、北二方ハ、えんさ山陽研究家の観るべきものなれ心、何れも其の梗概を尋ねたる略説にすぎず、尚山陽の閲歴を論ずるやうなれ、かの記ことも書き深へ、山陽の書と就ても更らに浩瀚材料あるべし、既に山きうなる原稿に多少の増補を加へ、

（四月六日稿）

○日々山陽の遺墨を蒐録するに日つけて、家義の類家出書いどれそれあるが、試みに書きけて見ると、今なつかしきものあるべくあるハが二十五點位あるべ、自分ハ手元に保存ゆく欲しいものあるとも買ふことも出来ず、亦強ひて蒐集をとめることも無いが、それにても北位ハあるべ、世の中に散在

してみる数の多いことハ推するに餘りある、断片零紙と雖も百円を下らぬ價がある事なれば、折算すると天下の頼家珠玉山陽の遺墨の價ハ優に一千萬円位あるべ相違なし、△印ハ今者家蔵に在り

顔面　柳圃　二字　今宗家に蔵す

都嬢　口上　同印中略家に蔵す

△弘毅　杏坪　今家に蔵す

鶴湯楊樓　白藝氏接筆

△石屏有記　稿本一卷

△蘇氏印略叙　数点あり

△三村七絶　至行活潑

△杏坪漁釣七絶　幅

△春秋日課賜宮高経　一帖

△春秋一行長解幅

△山陽詩短冊二枚　幅

山陽一家書翰　三卷

山陽書簡　三卷　皆市幕に譲る

△杏坪月仙の囲碁の図に題する詩幅

山陽加筆の仏外詩文

△山陽荒かき小切一枚

頼三樹隆宮八家文評 全部

山陽手澤南北史 春水筆本

閑谷饗歌 春水侍 山陽筆ガキ

△頼三奇詩幅

無歇山水長條幅 山陽画 春琴題賛

△春水小切一枚

● 山陽自刻印二箇

△外ニ 山陽手澤 一箇

岩島図巻 晴雪題字 山陽清跋

北日山陽録の凡例を出る又系譜の増補成る、年表を増補

山陽画論巻千紙成る

四月八日記

○夜雨の雨漸く収まり初来山陽の逆事を録す、偶〻中田生来り一瓶の天仙と切り花を贈る、則ち床に置き相親しむ、坐中初めて春を生ず、午時に至て出て神田の書店に山陽の資料を捜す、書後数跋小共一也北等の考家花〻ものも其後大隈公侯に寄托し手元に存せず、重複を厭わず蛙の断必ず出る、此者山陽の人児玉旗山の編輯する所数跋の終りに附録して旗山の遺行を収む、善き事の本旨なるべしとある を見るに編のもの初稿本也、哺時銀坐の竹葉食堂に入り日向うんとに二瓶の酒を傾く酒醇下物皆口に適ふ

山陽を録するに、地事無る可らざる也、一笑（四月九の記）

○先頃奈良美術研究会なる会のもとに二枚の石佛拓本は大和三和の庄家所蔵の彌勒谷と云所と有るものとを中学に早く失せ残る所左右二体なり、この佛のことは元亨釋書にも載せあるよりて一体の失せざるもあるべき事と思ふ拓ぶるに堪し難けれと厚サ四寸程の板碑の表面に刻したるものとぶ、板碑とは所謂こ穴なる大碑也、多分中学生等の拓るその材を用ひられ、今存する二体も学つて妻印さんしことあり、学をおそれて沈

沈じみをそうしとか、刻の時代は藤原朝なることと今定論あるといへ、石面の彫刻は手法甚だ金属とは同じからざる節あり時代の鑑定甚だ難し、従来金属佛は主として研究されし、石像は放抛されし、時鑄造の難き石刻の鑑定は一種の眼識を要する所なるか如し

四月九日録

○日本外史の詳注を作られし二十数年心血を注いだ先生元次郎氏余の叢書に資られと其の稿本を拙く此の頃来られこれより外史に就いろいろの事を聴いた結果、余が著述に補足を要することが出来、

此の未五十枚餘の原稿を心つけ、多くハ日本外史の部に屬する補遺ぢゃん者の成者こ漏れたるものあり、其目を大略録すると左の如くもある

一外國文外史の事

一川越版校刻日本外史十四版年月のこと

一外史の首部に載せある書目の事

一山陽が遺史を撰しこと内實帳中秘として既家にもと所有なること

一小竹自ら日本外史所在のこと

一川田甕江が糸誤の稿を中止し居る由

一高松藩公も外史補遺の稿あること

一山陽の國文を非難し居る代表の文八七賀侯宛と帆足萬里二家の心を所る事

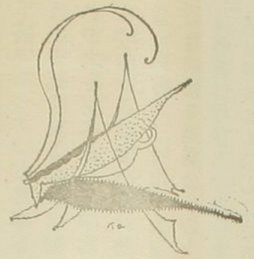
一樂翁の未刊花月草紙を進獻し外史を得たる消息の拙しあること、

一小竹の撰文山陽の墓誌ハ崔小竹自筆の行草と乗せある事

一岩村南里が山陽の趣味癖を難し居る文

以上ハ皆考究と據て得る材料にて、先生の著述ハ日本外史の異本として最も定稿のものなる以

之其の大略を錄して余の著に收め世に發表せんことを
約し其の稿を携へ、先生は支那版の寸鉛日本
外史一部八冊を紀念として余が小粧廬に寄附せり
此書は余が案中未だ刪此の書に、何故うも此書を日
本に來さこと考し稀也　四月十二日錄
○草茅危言、稿本の丸亀に就き今井八左のしとく語
る改刊回書根拠紙三月號に載せたるものを、
る收む　四月十三日



草茅危言の稿本及傳寫本に就て

今井貫一

本誌第五十四號に幸田成友君は拙修齋叢書に就て考說せられ、特にこの叢書に收められたる中井竹山著草茅危言の版行に關する公邊關係の事情を、江戸町奉行所の記錄に依て詳說し、之を明かにせられたるは感謝するところである。然るにそのうちに草茅危言はその稿本が中井家に於ても早くから絕え、隨て傳寫本なども傳はつて居らぬやうに云はれてあるが、是は事實全く相違であるから、此點に就て一通り辨明して置く必要があると思ふ。

幸田君は京都梯普造の十冊本校正（校定にあらず）草茅危言版行の件に關する江戸町奉行所記錄中に中井桐園の大阪町奉行所への答書の摘錄があつて、夫れに「草茅危言と稱し、御政事筋の儀を認めた書物は先代中井善太竹山の著述で、寛政度松平越中守大阪表御巡見の節、御沙汰に應じて差上げた。併し右體御政事筋を認めたにより、他見を許さぬは勿論、書殘し持傳へた分も無い。序文は傳承して居る通で相違もないが、其餘の文面は善太の著述と相違の有無を見極め難い」とある

を、其儘採つて之を信じ、進んで「桐園の子に木苑麿といふ方がある。明治維新後懷德堂の閉鎖、中井家の東京移轉といつた風な、色々の難關を切拔けて、よく祖先傳來の書類を維持保存せられてゐたに拘らず、其の中に草茅危言の草稿と稱すべきものは勿論、其の寫本すら見出し得無かつた」と云はれ、夫から遂に「竹山の遠慮から稿本は早く燒棄てたものらしく覺える」と推斷し、最後に「中井家にすら傳つて居らぬ草茅危言を、何處から引張り出したか、草茅危言の第一の版本は拙修齋叢書本であるから、たゞ此一點から見ても中西忠藏の功は沒することの出來ぬものと思ふ。」と云はれて、稿本も傳寫本もない草茅危言を、叢書に收め得たるは、編者の功績であると稱揚せられた。

然るに幸田君が燒棄てたものと推察せられたる草茅危言の手稿本が、幸に亡失せずに、其寫本すら見出し得なかつたと云はれたる中井木苑麿氏の傳襲中に、竹山草稿當時のまゝ少しの異狀もなく現存して居るのである。又殆んど無いものと

推定せられたる傳寫本も、既に危言脫稿當時に早く寫し取られたものだけでも、私の知つて居る限りで四部もあり、其一部は現に大阪府立圖書館に藏して居る。稿本の方も久しき前から府立圖書館に寄托せられてあつて、之は又屢展覽會にも出陳して京阪地方では、能く人に知られて居るものである。かやうに稿本でも傳寫本でも、望によつて何時でも見ることが出來るやうに提供せられてあるから。京阪地方では其有無などは問題になりやうもないので、私は幸田君の所說を見て、實はおかしく思つたのである。

圖書館に預つて居る草茅危言稿本は、申迄もなく所有者中井木菟麿氏の寄托である。中井氏は先に東京移轉後舊懷德堂及び中井家代々の遺書遺物を東京に移して嚴襲秘藏して居られたが、明治四十四年の秋大阪に於て懷德堂師儒諸先生の記念祭典を擧行せるを機會とし、豫ての望でもあつたから、その一切を擧げて之を大阪に返送し、祭典中之を展覽に供し、續て府立圖書館に寄托せられた。問題の草茅危言手稿本は卽ち此寄托書の一である。今この稿本を見るに、極めて入念の手稿であつて、其鄭寧なること多數の竹山手稿本中に於ても逸史や奠陰集と同架に列すべきもので、樂翁公への上進本も必ず之を原本として淨寫したに相違ないと思はるゝ痕跡のある整備の正稿である。勿論草茅危言は幕府の執政に誨へんが爲めの書で、竹山が力を極めたる撰述の一であるから、第一の目的たる樂翁公への上進を終へたる後といへども、其稿本は鄭重に保存し、之を重寶として子孫に傳へんことも圖り、或は門人にも示したであらうと云ふことは、强ち間違つた推察でもないと思ふ。現に此稿本は他の重要なるものと同じ秘笈に納められて重代傳へ來つたものであると中井君から聞て居るのである。かやうに大切なものを、幸田君が誤つて無いものとせられたるは兎も角もとして、現在所藏者たる中井家當主の桐園が、何故に之を無いものとして町奉行所に申立てたのであらうか。不審に堪へぬのであつて、私は桐園の具陳が假令如何やうにあらうとも、之を知らぬと云ふことは容易に信ぜられぬのである。

桐園は履軒の嫡孫で、もと中井氏では分家であるが、竹山の子碩果に子が無つた爲めに、十歲の時途に分家を廢して宗家碩果の養子となり、天保十一年養父歿後年十八で家督を相續した人である。そこで桐園が町奉行所から草茅危言に關し尋を受けたのを天保十四年とすれば年二十一の時である。さすれば既に家藏の遺書全部を自ら保管して之を熟知して居たらうし、且養父碩果は最も先代の遺書を尊重した人であつたから、其遺風を承けて居つたことゝ思はるゝから、草茅危言の如き家藏中の大切なるものがあることを知らぬと云ふ筈はないと思ふ。此の如き考へから私は幸田君とは異なり、疑の眼を以て更に桐園の答書摘錄なるものを能く見ると、序文は傳承して居る通りであるが、本文は書殘し持傳もないから一向に存申さぬと云ふやうな申立は、其申立振りからして甚曖昧なものゝやうに考へられ、之には何か他の故あつて殊更に事實を隱し、所謂ゆる其場逃れのよい加減なことを白々しく云はれたものでなからうかと思はれるのである。或は草茅危言が時務を論究したものであり、又老中の需によつ書れたもので元來は他見を憚るやうな性質のものでもあり、殊に當時其版行が町奉行所の問題となつて居つたから、當らず觸らず累の懸らぬやうにと、故と不得要領の返答を爲したものかとも思はれるが、是は單に私の想像に過ぎぬことであるから當にはならぬ。尤も答書中序文傳承云々とあるに就ては、中井家には稿本の序文の外に別に竹山自筆の序文が一本あつて、夫を桐園が他の類似のものと合綴保存して居たと云ふことを中井君から聞いたことがあるから、或は桐園は此別通の序文のみを知つて居て、肝心の稿本を失念したとも云へるが、複本片紙の序文を大切に扱ふ程の人が、本書を忘れるとは頷き難い話である。兎も角も桐園申立の詮索は別とし、私は之を眞實ではないと判斷するが、幸田君は先づ之に信を措き、引て現存の稿本までも無いものと極め、燒棄と推察せらるゝに至つたのである。

次に傳寫本に就ては原本脫稿當時のものが、前述の如く圖書館に藏して居るのであるから、是は辨明の必要もないが、私の知るところをこゝに書き添へて置きたいと思ふ。館藏のものは竹山の高弟早野橘隧の舊藏で、各冊表紙の右下に求仁堂と云ふ橘隧の藏書印記があり、又表紙外題は自署である。序文の配字は原本の通り、又本文は彼是校讎の結果、誤を見出し難い最も正直なる善寫である。其書風を見ると橘隧の寫では無く、竹山の子蕉園又は竹山の門人瀧蘇亭のに近く又序文句續の附方などは蕉園風のもので、其邊の臨模であることがわかる。之に依て考ふるに此傳寫本は原本からの直寫でなく、復寫であつて、此外に蕉園又は蘇亭の寫もあつたことゝ思はれる。傳寫本は以上の外中井木菟麿君また一本を藏し、竹山の門人脇愚山にも謄寫があつた。愚山に傳寫本のあつたことは左記愚山の草茅危言、跋文に依て明かである。

長之逸處海隅。縱遊山間。殆如遺世絕物之徒。而區區懷抱。未克全忘於蒼生也。是以每聞前史之治亂。聞時政之得失。一喜一憂。未嘗不動於心。而形於色焉。往歲戊申。修書竹山先生。而有請曰。當今之世。君子或事事乎。其必有時措之道。調齊之方也。伏望一出其所蓄。以見無隱之實矣。先生弗報。若有所思然。既而聞執政白川侯。巡視之次。延接咨詢。禮遇孔優。於是乎有危言之獻矣。但機事之密。不可漏泄。則非千里逸處之夫。所得而窺也。無幾矣。遽爾解職。惜夫功業垂成。而世道轍遷。豈可不爲天下長大息乎哉。丙長春。長之入津。竹山先生乃出草茅危言五卷曰。此老夫經綸所寓也。而今已矣。唯子也。不可以不示耳。長之謹受讀。掩卷嘆曰。有是哉。君子所蓄之大。而所發之難也。嗚呼微僕。先生安得其言如斯危哉。微先生。僕安得草茅之議如斯悉哉。獨恨天之未欲而不使比書直爲當世之用耳。抑嚮有請而弗報者。蓋先生難於其發也。非靳也。幸而一發之。時乎雖未可。豈無它日。固請灑還。竢謄寫之。喜風志之得酬。遂書於其後。

寬政八年夏四月　　南豐脇長之拜撰

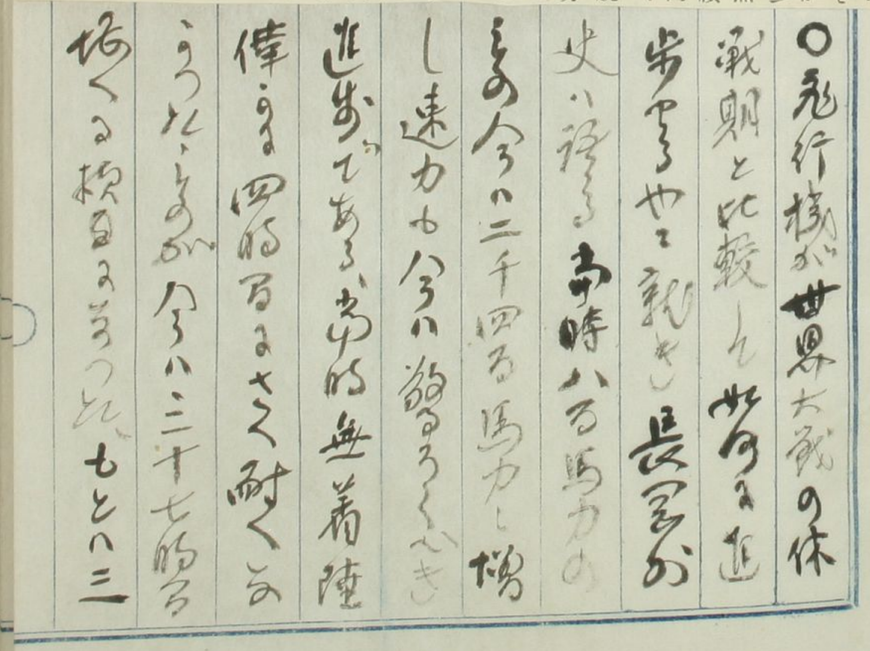
此跋文は從來の數種の版本は勿論、橘隧の藏本にもなく、唯手稿本の後に加へてある愚山手書に係るもの一本のみが存して居るのである。愚山は逸史にも序文を書いて居るが、危言の此跋文は其文面にある如く、愚山が九州から大阪に上つて來た時竹山から初めて草茅危言稿本を示され、尋て許を得て寫取つた時に加へたもので、逸史の序と同じく師命に從つたものであらうと思はれる。尙ほ跋文の年紀にある如く寬政八年四月に書いたものであるから、愚山の謄寫を同年とすれば、夫は寬政三年冬の危言脫稿から五年餘の後のものである。

此の如く竹山は草茅危言其稿を終へ、樂翁公への上進も終つた後は、四年間に渉つて書上げた稿を整へて、之を家に保存すると共に、又親近の人々にも之を示し、且請はるゝまゝに其傳寫をも許したのである。即ち草茅危言は獨り中井家に稿本が傳來するのみならず、若干の傳寫本も亦既に竹山在世中から門外に行はれて居たことは事實である。かやうに考へると中西忠藏が拙修齋叢書に草茅危言を收むるに當り、其底本を得るに就ては幸田君が云はれたやうな左程の困難もなく寧ろ叢書中に刊行せる數種の竹山履軒の著述類と共に、何れかの關係筋から、其傳寫本を或は容易に引出すことが出來たものかとも思はれるのである。

以上にて幸田君の考説に對する私の辨明は盡きたのであるが、序に餘談として竹山が草茅危言著述の事情及び其稿本に就て概略の説明をこゝに附け加へて置く。竹山が草茅危言の撰述は世に知られてある通り、全く松平定信の需に應じ、所存を傾けて時務を論究し、爲政の參考に供せんが爲めに外ならぬ。その著述當時の事情は竹山手記の學校公務記錄といふ、安永九年十一月から寛政九年十月に至るまで、十七年間に於ける懷德堂の公邊關係の記錄中に書かれて居る。安永九年は竹山年五十一で、當時懷德堂では三宅石庵の子春樓が學主の職にあり、竹山は其の預人であつた。然し此から二年の後天明二年に春樓が歿してから、竹山五十三歳で衆に推されて學主の重任に就き預人を兼ねた。又寛政九年十月は竹山六十八で、其前年に學校災後の再建も成就したによつて、是年隱居して名を渫翁と改め、蕉園に家名を相續せしめ、預人の職も讓つた時である。此公務記錄にある十七年間は懷德堂では學風大に振ひ、竹山盛名を馳せた時代である。

此公務記錄に竹山自ら記載せる所によると、樂翁公が巡見の爲め大阪に來着したのは天明八年六月二日で、直に其翌三日に越中守少々御尋被申度儀御座候由依て明四日七時過旅館迄御越被成下樣と云ふ用人から剪紙の案内狀が來た。依て竹山は之を請諾し、大阪町奉行に其由を屆け置きて、約の如く四日旅館松山屋敷に公を訪ふた。樂翁公は其日七半時に巡見先から歸館し、先づ先客の町奉行松平石見守を引見し、其退出後直に竹山を案内せしめ、今まで石見守の坐して居た席に就かしめた。此時名披露にも及ばず、公より直に聞及びたるに今日初めてと云ふ挨拶があり、續て竹山學術の立方、敬之字に手を下す心得、其外經義等から、京阪諸儒の取沙汰、世事民間の事、諸國諸侯の風儀、古今書籍の義、長崎之事其外種々の諮問があり、之に對して竹山一々應答、二時ばかりして使者の間に退出、こゝにて樂翁公巡見中の例を破つて料理酒を賜ひ、九時旅館を辭した。其時用人を以て内密に、以來何事に不寄存寄候事ども追々申上候との沙汰があつた。竹山は年來一書を撰述して、國事を論究しようといふ宿抱があつたが、偶この内命があつたから愈思立ち、直に同年七月に起稿、十一月に至り其の一部を脱稿して之を公に送つた。之が現存草茅危言稿本の卷之五で、初めは卷之下と稱したのである。何故下卷を先にしたかといふに、公務記錄に、先差向大阪之事を下卷に認可申存念にて、此分當用の事故先下卷より草成致しとある如く、最初に全部の腹稿を構へ、大阪の事を最後に述ぶること丶し、先其部分から稿を起したのである。この下卷を上つた時、上卷は來春に至り速に草成して差出すべき旨申進めた。翌寛政元年二月には白川侯より鄭重なる贈物があり、竹山は春早々から草茅危言上卷撰述に着手、同年の冬に至て脱稿、依て之に序文を添へ卷之上として差上げた。然るに此前後の二冊にて論述が盡きなかつたので、更に稿を續け、追々出來に隨て次々に一卷づゝ上進した。而して前二回のものを上下と爲したるによつて、三度目のものを卷之中乾、四度目を卷之中坤、最後のものを卷之四と附け、其全部を脱稿したのは寛政三年の冬である。公務記錄に同年冬迄に草茅危言追々出來、白川侯へ差上候所全部四卷に相成候と記してある。この四卷とあるは最後の分が卷之四とあるからのことゝ思はれるが、其實は全部で五卷になるのである。

右の如く竹山は草茅危言全五卷を卷之下、卷之上、卷之中乾、卷之中坤、卷之四と云ふ順序に草し、又其順に差出したが、愈完稿後には手元の稿本を整理し、前に上としたるを張紙して一と改め、以下同じく中乾を二、中坤を三、四はそのまゝ、下を五と夫々訂正し、而して各冊表紙題簽には宮商角徵羽と云ふ別稱の卷番を附し、かくて區々になれるものを盡く劃一にし、一部の完本の體に成して保存したものである。稿本の整備せることは前にも述べたが、尙ほ仔細に見ると、一二字の加ふべきものは正しく之を加へ、又欄外の加筆其他にて除くべきものは、之を剪取り代りに白紙を張り跡を止めず、剪取り難きところは正しく之を抹消してある。要するに最後の稿本としては上乘のものである。



噸しか積めるようになったが今は二千噸積める、高さは今も一萬四千メートルまで達する、富士山の大きさレコードは今は九万六千二百とやつたことである、郵便物旅客の運搬の速歩も驚くべきものがあるが、夜間は危険のあることは著陸することとなつてゐるこれの代が無線利用されては夜間も飛行をつゞけることゝなる、陸上の要衝四五個所（シカゴ、アイオワ、ニューヨーク等）に電燈を装置することとなつた、其の光は大きな電力は四億五千万燭光である五十哩を照らす力がある、赤三十数箇所に五万燭光の電燈を設け三哩毎に一アセチリンで五千燭光を照らす動力は地の設備は組合の大ぺりし合社の受取に依つて行う

今は夜間も休止せず飛行を継続してゐる

戦時猶の飛行機飛行船が英都を見舞つた実況は今は国に発せられるが略国を次きに収めた百）

りに飛行機の動員された回数が五千七百回飛行船の数

本が五十一回合つてゐるは回である、搭乗員は死者千三百六十人傷者三千五百六十人とある、地図の中に黒点が斑々として蔓延のことく見えるこれは着陸とあるこれは其の周囲の黒点のあ

る所が英都の心臓を見事に大切な場所であることを示したもので、斯る多くの着弾があるにも死傷が六千人位に過ぎないのは、宮城の少ないのである、英都の家屋は不燃焼材で出来てゐるから、到る所に火を焚くことを、多くの地下室があることと、地下の鉄道があることとが、此の大戦の場合に面倒雖不とすることのある、何る地點に飛行機の襲来を験知する聴音器が設けられてゐて、敵機の来るを早く知つて、それを全市に通じて警戒を飛ばすと、何の防禦も迅速するので、初めこそ狼狽もしたが後には沈着

る所と時宜の紙幣の隠れたことを云ふ、

飛行機が投げる焼き玉はハテルミットとなるたまで大きさ三寸位しかないが其の力実に猛烈で一発摂氏三千度の熱を出す、

一発の家屋の気層を突き破り地こう達とさのバこまで、木造家屋なら勿論立ち火災を起すのである、北玉は二飛行機で五千乃至七千も積み得ることが千発丈で東京市の全市の家屋を焼き拂ふ迄、今後の戦法は先づ第一次で此の焼き玉を投げて火災を起し、第二次で毒ガスを飛行機

から散布して、市民の流動を停め、市三ヶ所を「テルミット」と称して存在するものの大建築物をバリダンで破壊する、中央銀行王城の数いどこびも堅固のものでは且つ大切なものであるから、これを破壊する為の深を破壊しようと火薬庫を潰しようとするのも皆バリダンの力による、英都では皇宮の西（皇宮の西）に池があってこれが皇宮の西面となることを恐れて池をつぶして雷爆を装置して保護したことである、西面の深も破壊されたが直ちに復旧をかくしたという日本の帝都と荒し敵機が襲来した数千のテン

ミットを上空から投下したが、その瞬間全市火災となるべし云ふまでもなく別庭行くの術はなく、宮城と長き防禦の手段はなく、今日は都市が要塞である宮城が大本営で大毒瓦斯の存する所であるから之のを堅固なる防禦ハ言ふまでもない、即ち上空の文明は地下と相を深城の苦しき立場にしめたと云ふべきだ、どこもそうだが中央都府は資力線の存する所である、別して日本のごとく工業は帝都に集中し兵器の製造まで帝都で行ふ所と相を第一の情況、帝都が全滅することあらば、市一線に立

つ軍隊が多く奮闘しても戦は決するのひまある、帝都は無塞であるに上は、無塞相當の設備がなければならぬ、それゝに多くの費用を大なる経費のを要しても帝国の存亡には換へられぬ、全市の家屋を焼尽し焦土と化し焼失せしめ、各戸必ず地下室を掘くなければならぬ、地下鐵道の建設をなければならぬ、大なる公園それは有事の日避難場とは富まるべきが軍需の物資を貯蔵所としなければならぬ、人命も大切なる所なれば斯るどの源は完全なる人體の心臓のごときものであるから、一個所につゝくことき単

純なることはいうまでも、数ヶ所に分散する必要がある、兵器製造所や兵営をも富まる都会から移すべき方がよい、大なる兵行場の設備が都会の内又無ければならぬ、これのことく遠方へ設けてあつて八用をなさぬ、空爆を受けるまゝ濠のごときもバツキンガムの池の前轍と鑑み、惜しむべき凡所や史的回顧の記念物を割愛し、全部埋めて空地を護う物がなるべく、尚は北墓のごと種々の禁戒を要することも一つ足らるべきが、帝都の復興と関聯して重大問題となるが、軍事的と行等先見ともなる姓

恩を復奏とりうんとすまハ概数まハきたるべ
○大隈老侯邸雑の際の相迎の恩賜并に御見舞
昔の事ハ侍従日録、恩賜録皇后皇太后有宮
ハ賜日記に記載へんありといへ共、其都合丈の
写しを添付致浴る或ハ部に求む、御見舞即ち左の
如し

侍従日録（抜録）

明治二十二年十月十日　晴

一午後四時大隈大臣外務省門前に於て亮行者
ノタメ送別ノ為御依て御手帯御使侍従毛利勤之

十月三十日

大隈大臣容体御見舞トシテ、岡田侍従参向ス仍テ両
陛下より賜品を持参ス

十一月十四日

侍従富小路大隈大臣容体為御尋川邸、参向ス

十二月三日

外務大臣方ハ御使高倉小路

明治廿三年二月十日

高倉小路午後大隈相模顧問官ノ容体御尋ト
シテ御使勤仕

三月三日

東園大隈顧問官邸ヘ御使

三月廿七日

萬里小路大隈顧問官病所御尋ニ付御使勤仕

五月十三日

大隈顧問官本日出仕ニ付參内謁見仰付ケラレ候ヨリ

五月十九日

萬里小路大隈顧問官邸ヘ御使トシテ參向ス

負傷後七回目ニ宮中ヨリ侍従ヲ差遣サレタル

以上ノ如クニテ御手厚ノ御事也

内事課恩賜録ニハ左ノ如クアリ

一 交魚壹折　外務大臣伯爵大隈重信

右負傷ニ付御尋トシテ下賜ノ事　十八日被下渡内舎人使書面ヲ以テ

一 金參千圓

一 御菓子壹折　外務大臣伯爵大隈重信

右本月十八日不慮ノ災ニ罹リシ為御尋トシテ特ニ以テ下賜ノ事

十月三十日被下渡　田中侍従御使

（以上二十二年）

聖上さま
一七寶焼花瓶（御紋付）　一對　松齋顧問宮大隈重信
皇后陛下さま
一白茶地錦　一卷　口上
一珈琲茶碗　一組
此分御手元御在合品　朱也
右思召を以て下賜く事
右ハ昨年負傷後二月十三日参内ニ付思召
を以て被下由ニ付　朱也
朱書ハ文書取扱者ハ参考ノ為ノ記録モノニ付

十

○皇后宮職日記　廿二年十月十八日

一大隈外務大臣午後四時過内閣退出途中外務省
門前ニ於テ暴人爆烈弾ヲ投付大臣微傷加ヘ付
三宮皇后宮亮御使御見舞トシテ折折御
料理被下
一二重折詰上　五種取肴下　鄭
右之通御品使　師岡仕人相勤

○皇太后宮職日録　廿二年十月十八日
一本日午後大隈大臣退出之途次暴漢者ノ為ン

頁傷ニ付右言上トシテ杉太夫午後参職相成直ニ
大限邸ヘ御使トシテ参向左後命ノ為ニ一度帰
職左ニ付
皇太后宮ヨリ　長二尺巾一尺四寸　杉二重折詰　上三種取肴　下鯨
御尋トシテ被下ニ付太夫御使トシテ同邸ヘ
参向お礼申上ル事

○皇后宮職日記　十月三十日

一皇后宮ヨリ大限大臣江重之内被下置ル
御使　香川志保子

廿三年五月十三日　大限枢密顧問官

右
皇后陛下ニ桐ノ間ニ於テ拝謁被仰付候左ニ
記ス下賜ス事
白茶錦地　一巻　代金ニ三十五円也
珈琲茶碗　一ダース　四十四円六十銭

○皇太后宮職日録　廿三年五月十三日

一枢密顧問官大限重信参宮御内儀ニ通ル

其後御中殿へ杉大夫誘引拝領被仰付物相
有之也

似シ昨年十月写傷之後始テ巻宮也

各記録ノ宮中ノ秘書ニテ外間ノ覧ヲ許サヽル
モノナリ、リレ〳〵おのづから録し方と粘糊あり
下賜品の代價まで記しあるハおもしろし
大隈侯倚記の材料
御墓参の許可を得テ勝本を得タレハ益々
其ノ全部ヲ録スト云フ
此書数を得タル時刻前、大隈舎侯と於テ

十

光侯の写傷の洋服帽を一覧し写
ツボン御部外套ノ一端に大ナル焦痕を残し
靴ノ一足もつまた破壊し得なるを見る南
時を追懐し無限ノ感に打タレ、偶々此際
此上ノ宮ニテ得タル日ハ奇ト謂フベシ

大正十三年四月十四日記

○前年小田時桂氏より贈い得る印に支那大家の
私印を模刻したる印この三顆あり各面印を
一　倪瓚之印　元鎮

二　張叔福印

三　祝允明印

字子祺

希哲

此の三顆共刻者不明なれども刻法酷似す蓋芙蓉
に似たるを以て桂馥も余も之れを芙蓉の印刻
と為し印譜に斯く注して今尚然り偶〻此の
坊間に路陶翁の印譜を始め罫紙を来携
幽期と云ふ二冊本を、中に名家私印の模刻を
多く収む、而して中に上録三顆六面の印に酷
似するものあり、依て余が印譜を出して彼此比較
するに毫髪の差なし、こゝに於て此印の刻者

分明す、余芙蓉の刻を立六顆花すれども陶翁
の印一も手かりしを憾とせしが、図らずも趙の印
なる三顆を得たるを喜ぶ　四月廿日記

○四五年前なる書肆珠琅閣に唐詩を行書に録し
たる冊葉手本体の大冊一巻あり、巻尾に棠陰
主人漫捧とあり　印も押してあれども一般印一顆鄭
を刻すること如くにして読難し、棠陰の清雅秀
堅の別称なれども、書体山陽風なれば棠陰家
に花せし義堅の書簡に今既に無く対照に由
なく、半ば之れを終ひ居りしが、此の山陽の文多

を探するにつき清国官費留学のことなる由にて及び
いろいろと詮索するに清宮は大なる山陽崇拝家なる
ことを察知せかるる、彼れが青年の頃くあるい宮
を尊敬すると判する所あり、明治終に嬉ひ入る、其
時ある事件に出所を訪ねて伝聞の豪家
の親者中を交りあり、何人の出を判しかねる
つき價い及故位なるとも其の出所は正しく
符合するものあり、最早寸疑を挿せざるがごと
し、北書並松の箱に鄭寧に納めあるものを
以て視れば何人か秀堅と無縁あるまじ大切に花

十

しなるべしと思はる、價二四とあるは偽物
なり、明治山陽の傳を修せるの連の没頭、山陽氣
分為りて濃る、北書も折柄の玩物となすを得
べし

四月廿四日記

○清の賜人の日本外史使支物、佐々木向陽著とあ
り帝も其人を知り得ざりしが、長崎の人で名を
玷と云ひ、杉南の号あり、崇水と評跋を附した版
本は北人の著述中に出でるを少き得た
外人で日本外史を評しおるものは二人あり、ヤンバーレン
とフリンリッヒ、前者は一冊にて國版せずと云ひ、後

者は滅亡して和文を存する、
日本外史を日本に一番早く出版したのを拙修斎
叢書として活字本で出したのが有名たる、政治
通鑑の時分に叢書と初め出版する拙修斎は

外史を最も早く木活本として出した拙修斎と云
ふは、中西伯基と云ふ人で、其傳は詳かでないが、
林鶴梁とは交りがあつたと見へて、北堂書記
収めた日本政記の序は鶴梁が書いてゐる。
川越松平家の為めに日本外史を校訂した人
は保岡孚、字は元吉、霞南と號し長野豊山
の高足である、

中西伯基といふ人は其傳は未だ詳かでない
日本外史を有名精細に論評して頗る要を得
ておるは長川東溟である、北人で長崎の人で国史評
跋と云ふ二冊の著がある刊本として世に行はる、外に
叙戦文評と云ふ稿本もあるやうで、外史の
叙戦文を特に評論したものと云ふが未だ見る
能はず
文吉は外史を大いに研究して其用語を就て云く
山陽は逸史を寫すやうに其語を改用してゐる
所、之其の一例と嘗く、之れは

逸史のあるが誤なり、さて虎ハ何とも義かなき事
ハ見ゆるなりといへり、

逸史巻二　二十九葉　藤吉自病其実微而心窮墓冊羽長秀柴田勝
家虎武廻国設姥為羽柴云々

外史巻十四　織田記下　五月秀吉斬佐久間盛政柴田権六于京師
盛政素虎武毎戦用鐵棒躬自陥陣人呼曰鬼盛政

福禅の二字を逸史用ひ山陽外史に就て用ひ而
して福ハ偏なるを得ず、小山の誤りを山陽踏
襲するなり

宇治川の河戦に佐々木高綱相手を無き紙を配
し逸乗の二字を用ひ、而して此字を馬車の迅ひ
つき乗の意なれ乗ず紙すの義なり、又外史に
砲礮の二字用ひあれ、二字同義なれ重複なり
山陽ハ礮の字の誤べし疎なりと謂る
○浮田博士から寸珍英玉史を二冊贈り来る、素版
で小兒の玩具に近かいなれ、なれ紙中なれ
二十三本の西洋史ハ一冊も無いから、まんじゅう粉屋
中のなれ、北の英玉史ハウナリヤム一世なれ
じ五世まであれて、中なれ多く人物の図かあり、形ハ左の

History of England from William I. to George V

の如くで、龍動の版で、表紙裏ハ Gorde Bros Charlesworth Co. とあり、二冊とも同じもので、巻本も標紙も表ハ「ものがたり」入りの玩具ニ似てゐる、なんなりのものも外国の度々出てゐるとのことで、海内ハ大本の積りで注文ニ応ずるこのが来て一笑したとい

四月廿四日記

○山陽録ハ本月一日ニ稿必西を始めて三十件ばかり書き送し、それから全部の原稿の整理をあつて見ると、甲の部ハとあるものを乙ハ移し乙を丙ニ移し丙を

さて扨ハ、まあ、いろ〳〵あり、獨立の部ハ、ここにあるべき筈のものを一部ハ置くべきもあり、山田敬徳ニ関係ハ、ハ比百部の内ニ入れ、残りハ敬徳ニ渡すべきで、全部ハ、十のを数へて全部整理を先ハ人を数へ比ハ二十冊ニ一冊の割ニ、毎の書き草ニ没頭し、実ハ毎の小時間も惜しんでゐるのだが、全部の整理がつかぬ、今更ニ容易ニ他人ニ書かせることハ切ニ手数を重ねる所以ぢあると感じた、コンナハ著ハ実ハ容易ニ書れも「趣味の整山陽」と一旦ハ定め、序も例言も

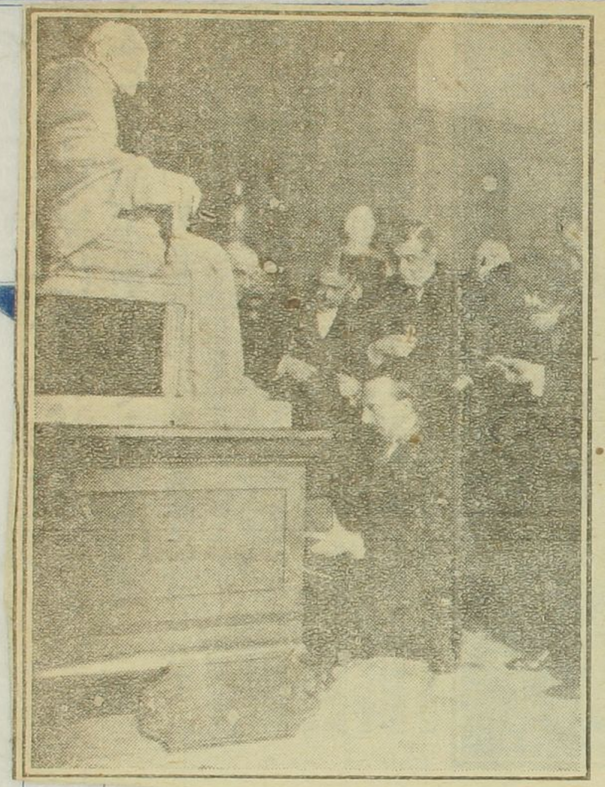
の待ちびきいとも又ちがひ、何分内容と合致しるの所
がある、強て比較するとすれば、更きいろ〳〵のもの
をかへ、移べるまゝ、そんとかのんべ平凡とするの傾き
もあり、城西書道は、お侯し、然書道は、
行をそなへるゐから、ハマん名を尽し、
て、「金か四十年間に観る山陽」と「醒めし目
で観る山陽」の二題のなのうとゞしして来た
が、後者の方がやゝたまるけれども、
四十年間に探榜する程に異少がある。
そんは、高は一考を要する。　四月廿四日録

つゝ、星巖の廣告であるから、その眞味を盛する、樹外の其居と清祥寺、共に俗称新十郎とあるも、面白うない、當時文人の引札の形式は斯様のものであつた。

○山陽の東山之記が花洛名所圖會の首端東山の條に附屬して出てゐると某書肆が語つた、北文は山陽の集に入遠しとある、名所圖會なる物めをあるとは誰れも義のつうちのことである、貴者を得て一説を要する、或は余の書の材料となるも知れぬ、

『ヴオルテールの心臓』發見

一世紀の間文豪ヴオルテールの心臓は轉々として何處にあるか知れなかつたが、最近途に發見されたその心臓、巴里國立圖書館にあるウードン作ヴオルテール像の磨石内に納められたのが、一八七〇年司書官ベブロンはヴオルテールとフレデリツク二世が親密だつた関係から、過逸兵に焼まれるのを恐れ、納めた小箱を分らない様に隠した。そこで本年一月二十日文部大臣や關係者が立會で調べた處「ヴオルテールの心臓、一八六四年ヴイレット侯後嗣寄附」とある青銅板があり、その奥の扉の裏側の凹處から琥珀の小箱が出て來たその中に黄色の小瓶圓があつて心臓形の金色の木か金かの包みを見出した。之はアルコールを入れたものらしかつた。表には「ヴオルテールの心臓、一七七八年五月三十日巴里にて歿す」とあつた。此の包みを開いて見る事は冒瀆だと云ふので、此の文字を信憑して其の儘元に納め、こゝにめでたく式を閉ぢたと云ふ。



○今朝の東京朝日新聞と北海を見る、鶏肋の感あり、こゝに收めあり(四月廿日)

○東京の保傳もあつた杉浦重剛氏と北海文門人等の文明の平素の事蹟を録し

を雑誌に掲ぐ、寝後翻復、往々興を感するものあり、
軍到天台道士と云ふ、余往年私学聯合運動と
屢〻会して交あり、道士甚だ庭訓を重ん、帝
大を化学を学びたる人なれども、また仏教に
著る教育家として熱心を設けて終始如一、漢学に
味ある気骨の士を尚ぶ、保守の頑固なるも真
面目の士と候あり、東京傳に学ばれたる故
なり、雪井武雄の詩を愛唱して深く中心に
を得し、終に東京の明治学校に一生
の快とするが如きも世人の真面目なり、故に

十

七月詩稿に就て必ずしも詩を以て
なるべきも、本人の風格をあらはすに足る、門人達の
を多く記臨まる所以へ、彼れに董陶の力のあることを
見るべし、彼れは一生貧を守り、一中学の校長として
のお勢のみなりしに、濱尾の推薦にて東京の
傳となり、彼れの和歌を守りたる年と指を酬
へらる、左の歌あるは無味を感じたる一二節と
思ふ、

大正十三年四月二十八日録

○先生曰く「西郷從道さんは偉かつたさうぢやね、河上の話に、伊藤公と一しよに李鴻章と談判に行く船の中で盛に伊藤をけなして、とてもあんなとぢや向ふで角力は出來んなどゝいふのを聞いて、伊藤は、なに李鴻章などに負けるものかと憤慨する、從道さんはさうして伊藤を勵ましたのださうぢやね。向ふへ着いて談判となると皆伊藤にまかせて一言も口を出さなかつたさうぢや。談判が終つて宴會のあつた時、小さな盃で少しづゝ飲む酒が出たさうぢやが、わしは酒が好きぢやとばかり、その強い酒を大コップに注いで飲んださうぢや。その樣が如何にも落ちついてゐるので向ふの人が、伊藤よりうわ手の人がまだ居るのかと思つた樣子ぢやつたさうぢや。さうして居るうちに李鴻章に向つてなんてごすか、貴國では男が子供を生みますか。一向婦人を見ませんが。といふやうな奇問を發したさうぢや。又或時宮中で宴會のあつたとき、某伯爵が明治天皇樣の前で滔々と大同團結のことを演說して居るうしろへそつと廻つて行つて椅子をのけておいた、さうすると伯爵先生案の定、腰をおろさうとしてひつくりかへつた。そこで從道さん、えゝ大同團結はこのやうに顚へりますと言つたさうぢや。それが天子樣の前じやからね。然し流石に兄さんには及ばなかつたやうぢやね、家が大分荒れてゐるので建てなほしては如何ですと言つたとき、御まへは今天下泰平ぢやと思つとるかと兄さんの一喝にあつて、流石の從道さんも一言もなかつたさうぢや。」（十一、七、一）

○一體私は自分の方からは、何事も控え目にしてゐるのだ。よく話す通り、自分一身に關して運動がましいことをしたのは、洋行當時のことばかりだ。國家の問題は別だ。

○自分は、やり始めると氣狂のやうになつてしまふ癖があるやうだ。前年皇太子殿下、御大禮參列の運動をした時の如き、溫順な入江子爵などは嘸驚かれた事と思ふ「あの時貴方は目の色が變つて居られた」といはれたよ。

○思ひ出すと、彼の條約改正反對運動の如きは、隨分猛烈であつたよ。大隈さんが、杉浦や千頭など、氣狂のやうな人々が反對するからと云はれたさうだ。

○それにつき面白いことがあつたよ。五年ばかり前に、中學校長會議があつた折、大隈伯が中學校長を招待した。其の時生憎缺席したが、丁度上野の精養軒で、校長連の懇親會が開かれ、其の序でに大隈伯を招待することになつた。私も出席し、一言を述べたいからといつて大體斯ういふことを喋舌つたよ。

私共が開成學校の學生であつた時分、伯は參議大藏卿であつて、非常に隆々たるもので、神田あたりには澤山伯爵閣下の寫眞が出て居りました。其の時、私の友人小村壽太郎が、寫眞の一枚を買つて來て、裏に

To Mr Komura from his friend Okuma.

と書いたことがありました。つまり將來は友人位になるつもりの抱負を示したのである。小村も遂には立派に成功して、眞に伯の友人たるに至つたことゝ思ふ。其の後增島六一郎君の結婚媒酌が伯爵であつたものだから、私は其の席上に於て始めて閣下に拜顏を得ました。又其の後は條約改正問題の起つた時であります。あの時は私共同人は、日本主義を唱へて、猛烈に閣下に反對しました。たしか其の頃閣下は、杉浦や、千頭や、氣狂のやうな男だと仰せられたさうであります。扨て近頃になつて見まするとと、閣下も「新日本」といふ雜誌を經營して、頻りに日本主義を皷吹せられるやうに思はれます。其れにつけても、私などは身體虛弱で、とても長く働くことは出來まいと思ひますが、閣下は御高齡であるに拘はらず、百二十五まで生きると、仰せられてゐるさうでありますから、どうか今後は、我々の日本主義を繼いで、充分御活動を爲されんことを希望します。

と、やつてしまつた。少々過激であつたかも知れんが、中學校長だつて、輕侮してはならんといふ意氣を示したのだ。

九月二十一日。前同所にて。畑君同席。幾程も無く白仁武氏來訪。

此の日は　皇太子殿下、特に舊御學問所の人々を招かせ給ふ。先生之に參列して歸られての御話。

○今日は、いよ〳〵思ひ切つてやりました。先づいろ〳〵の御馳走があつて、後にシャンペンが出ました。その時私は立ちあがり、直接殿下に對し奉り

謹んで言上します。私は今より四十年前、二十二歳で洋行しましたが、其の時分の意氣をこゝて御覽に入れたいと思ひますから、どうぞ發聲の御許しを願ひます。

と申上げたところが、殿下は御笑ひになつて居られた。

宜しう御座りますか

と念を押すと、殿下は矢張りにこ〳〵して御首肯せられた。

そこで

當時は此處に御列席の濱尾、山川兩男爵も、橫濱まで見送つて下されました、私が船の中で歌つた詩は其頃漸く世に出た雲井龍雄の詩であります。作者は或は順逆を誤つたといふことがありませうが、人間の意氣は當に此の如くあるべきだと思ひます。

と前置をして、彼の「生きては當さに雄圖四海を蓋ふべし」の詩を吟じた。しかも隨分大きな聲でやりました。

○今までも、何時か折を得たら、御前で吟詩をして見たいと思つてゐたが、今日とう〳〵之を實行した。

語り終つて、先生はさも愉快氣に微笑せられた。

固より座興では無く、一種の教訓だと思つて御聽きになられたやうであつた」

○山川又曰く「殿下はいろ〳〵の人々に、隨分打ち解けて御話があつたが、杉浦に丈けは、少し御遠慮なされるやうであつた」

○これは山田の話であるが、山川に其れほど分つてゐるならば、殿下に於かせられても無論御了解のことだと思つて、非常にうれしかつた。

○御遠慮云々、或はさうでは無いかと、自分も感じてゐた。丁度其の位のところが宜しいかと思ふ。

八月十八日。前同所にて。

○昨日牧野宮相を訪ね、一時間半に亘つていろ〳〵の御話をして置いた。

○少し出過ぎたことではあるが、自分の考を遠慮なく述べた。皇太子殿下將來の御學問は、外交、法制、經濟、佛語などでありませうが、それに就きて

外交。小村欣一

法制。穂積陳重

經濟。田尻稻次郎

佛語。一瀨勇三郎

の諸氏が最も適任であらうと思ふこと、並に

頭山滿

梶梅太郎故勝海舟伯の子

の二氏を擧げて、精神上の鍛錬をせられるならば、宜しからうと言つて置いた。

○昔は西郷隆盛でも、御尊父(天久保利通)でも、言はゞ草莽の士であつたのだが、其れを拔擢任用したが爲め、明治天皇の御修養も立派に出來たのであるから、少し思ひ切つたことをせられなければ、駄目でありませうと附言して置いた。

八月二十七日。前同所にて。

○山陽の手一二を錄す菊池惟豊並に山陽自筆評點ある絶句數首を載す、中箱書うて六百四の購ふ所とふ、今ハ震火に罹りて烏有に帰し了る、淺田徳則所持に山陽遺墨八日野資愛に請ひて錄し了る

に評を加へ了るあり

いつもやに校主侯の陳列に一覽す、奉書大の紙に資愛が錄し了る詩へ徒に之を吉風の山陽に酷似すること今も面前に髣髴たり、其の餘白に山陽の評語ハ細書十數行あり、毎行其評語を讀るに堪へ錄し了る、今次余が山陽傳に之を載せんと欲し、極度侯士を依し一資を求めし處、震災に遭ひ烏有に帰せり、惜んでなほ餘りある事なりとす

之れ其の評語の大要のみを摘記し侯爵が好意に感謝き来る事を望む、資愛の詩ハ既に載せる事

しかるの論なり、詠物嶋田の山陽は、詩語を代ふるに詩
論を以てし、詠物は如何なる何等の素を寓して必る
べきかの如き、課題をば出さんとの詠物なるべし
格別、私らさる論なれば、詩とすべきまの題
はいくらもあることなれば、詠物と力を改すの不可
なるとの論を陳べたるものなりといふ（四月廿八日）

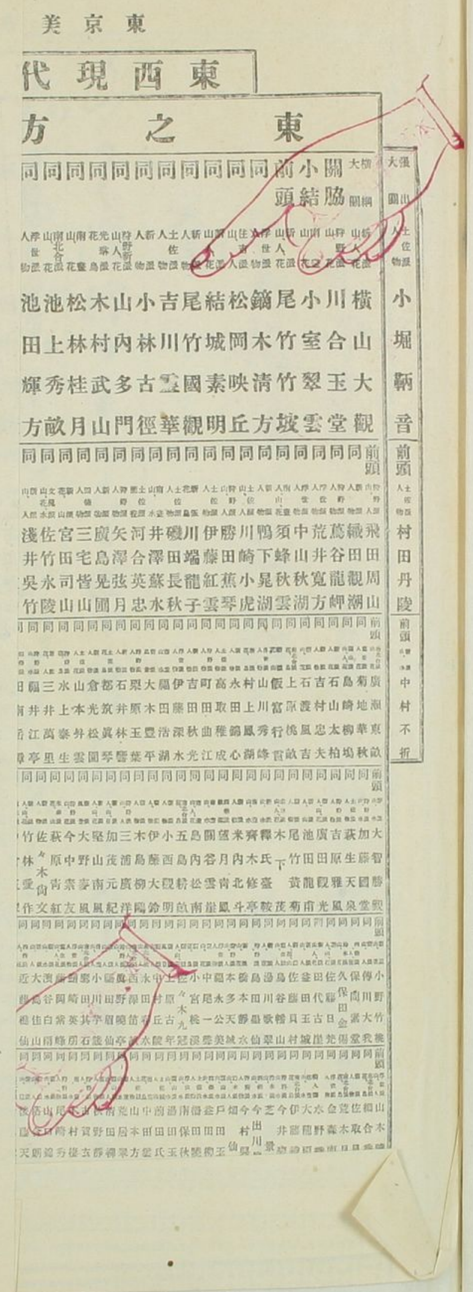
竹田の尾三首の豪家滝山夢研の為めに捕
獲し写山形十二枚一双は今離の素仙と称
せらる、上欄山陽の詩を白鶴帖を同じ仮
に借り読まんと試みるも未だ読む能はず、此の

後も自分余が山陽の一資料とする人きの眼
の達者のものに托して謄写するを要す、此
の作用の大低は美し作用者一の傑作と
なすを得んも之を倫後居る首の豪家滝山
夢研の為に係る

○余が山陽は其の詩評を載せたいと思ふ桂湖村
氏の評をもてくんよる業記の為めに人をやつて此所
に流を者かもてくんよる其まで談話の書記を待
が立ち談論しも、筆者を必るまで談話の書記を待
つてくんよるあるまで、十の如く待つと、漢文
三者の比三十頁ぢうの行を寄せて未だ来たらず

ると各時代の詩が精細に評され、其の長所や短所や
同前集や同時代の人と較べての優劣や、唐宋何れ
を宗としてあるやなど詳かに論じ、歴家の他の二
人（吉田東篁・廣瀬旭窓）なども論ぜず、廣瀬旭窓詩續論な
ども論じ、從来の諸説等つて無い種まで評論
で徒に他人の言い残してることを云ひ、世と雷同附和
するを免れず、これ素絶明を偽くこれ詩を非
とし、晩年の作を棄捨するあらずとしそして
て議論精核多くは肯綮に帰してある、例の潘
り性僅に十のむうの間まを深穿し

ようもこれ丈のものが出来れと一驚を喫した位ひな
る、全体時文と言いてみるこれは北祖を漢文のまく
載せその文体の統一を破ることなくるけんど書
き変ずば折角のものを木一換することもるんべ別
點を施して全文を収めることにした（買木北の記）
也文拙著の一異彩とうるもあらう、從来の山
陽研究家は未だ詩評は指を深めたものはな
い、
山陽詩鈔は高年時代無を漢人に加、昨秋一
度の更要を感じて後ちを見ること、從前無とし

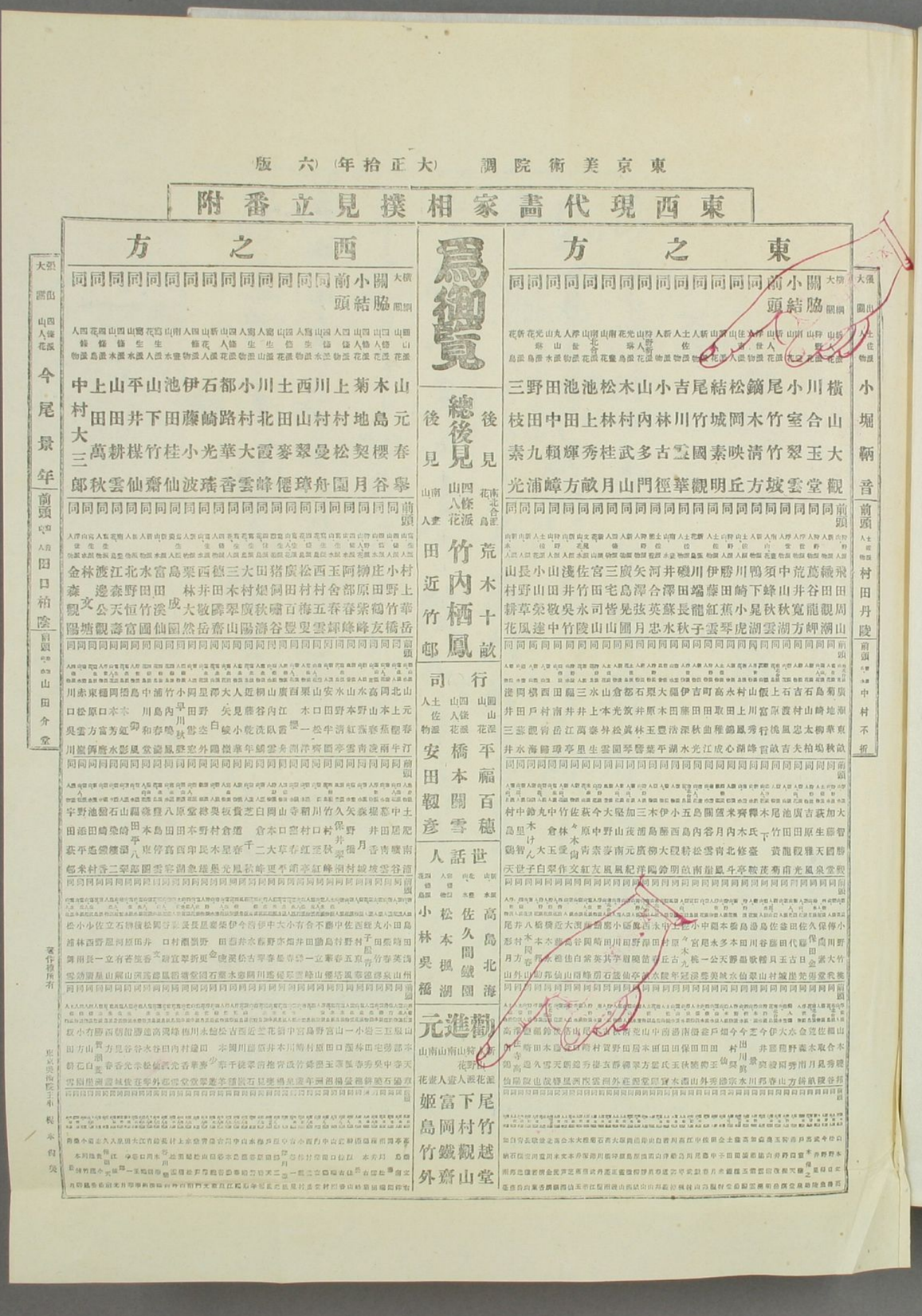


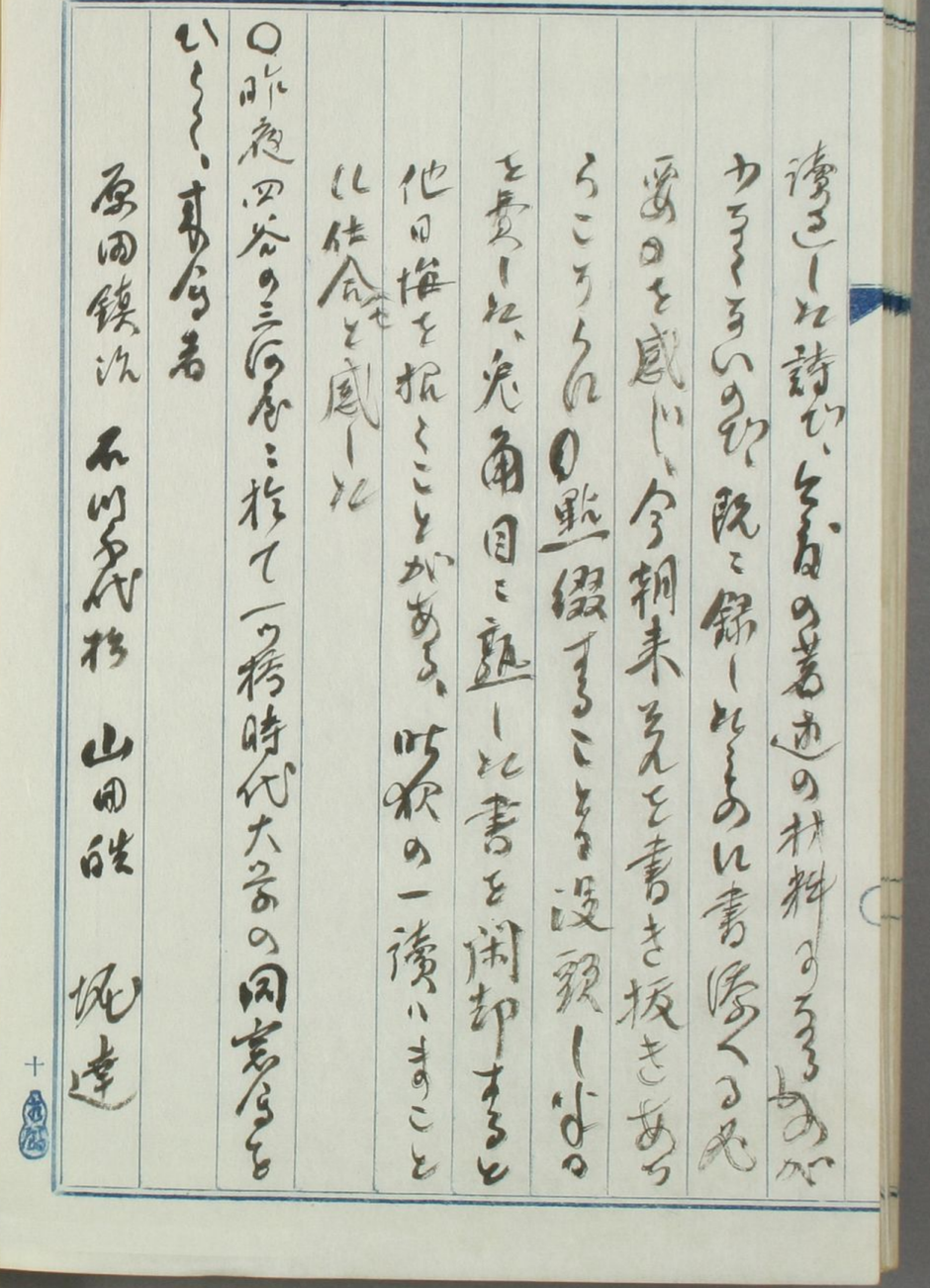
讀さしの詩ひ、その巻の巻頭の村料のうるあ
かりくるいの如、既に歸しなくあれ書陽くる光
要日を感じ、今朝来それを書き抜きあら
ちこちうの口點綴すること沒頭しなの
を費し、光角目と疲しに書を閑却すると
他日悔を招くことがあり、昨夜の一讀いまこと
に佳会と感じに

○昨夜四谷の三河屋に於て一ツ橋時代大学の同窓会を
いらく、来会者

原田鎮次　石川義雄　山田敬　堀達

十


東京美術院調　（大正拾年）（六版）
附番立見撰相家画代現西東
西之方
東之方
為御覧
総後見
竹内栖鳳
荒木十畝
田近竹邨
平福百穂
橋本関雪
安田靫彦
佐久間鐵園
松本楓湖
高島北海
元進勧
今尾景年
田口祐陰
小堀鞆音
村田丹陵
中村不折


○昨夜四谷の三河屋に於て一ウ稿時代大会の同窓会を
いとゝ、賑合者
原田鎮次　石川孝郎　山田改造　城達
十

[illegible]し[illegible]詩[illegible]、[illegible]の著述の材料[illegible]
[illegible]既に録し[illegible]書[illegible]

田中四平　[illegible]

初月雄峰　石[illegible]

余

[illegible]洋行の金[illegible]田中[illegible]
[illegible]、初月の[illegible]
[illegible]
三ツ[illegible]年の[illegible]
年[illegible]初め[illegible]
道中[illegible]
[illegible]、餞[illegible]
[illegible]

れの見たりし、席上例の古年時代の四書講書
各々其を威す、席上余と日米問題を論ずるとの
注文起り、田中山平を打ちて余氣候を仕く
曰く米国の増長も極度に達す、去るを日本及び
亜を動かすべきものなり、人種排斥が主題と
なりたるは、宜しく全亜細亜を糾
合して米に當るべし、露西亜を味方に引
入るるも必要なり、主として支那を煽動して衝
に當らしむべし、日本は盟主たるを得すと
雖も戦争は可成回避すべし、亜細亜の同盟

なるべし、戦はずして敵を制するを得べし、唯此地
外交の衝を高くし政治家の無きを奈何とす
と余が主張せし満洲略説を問はす、田中は
土耳古のケメル、パシヤの功を云ふ、余曰く世界大
戦に大儲けを為したるは土耳其なり、土が各国
殊に露西亞の壓迫を脱し初めて獨立の復し
たるはケメル、パシヤの功なりと雖も実は世界
大戦と各国の疲れたること、露の国情は日と異な
るしなりと論ず、田中は猶迂論なりと黄禍説
の初めて起りたるを云ふ、余曰く、全亜細亜の

同時ニ之ヲ白人ニ對スル大ナル黄禍ヲシテ、獨逸
の夢想ヲシテ今後起ラザルヲ得ス。
而シテ之ヲ挑発スルモノハ実ニ米国ナリト
説ク、余牛鍋ヲ啖ヒ鶏卵ヲ投シ、アンビニーメンの四
方山積ル黄味の一團ヲ圍ミテ、満座ニ示シテ
曰ク、黄白の関係トコレニ就テ看よ、白の跋扈
ハ如此シ、所謂黄味ハ白ハ敷物
ナリ、アンビニーメンハ黄味ヲ擁護スル
ナリ)きずと石川博士ヲ顧ミテ一笑ス、(石川ハ
動物の学ハ家)田中西平ハ邦人の外語ヲ操作
スルノ巧拙ヲ説ク、余曰ク拙ハ拙ナリ、唯ニ拙ト
雖モ用ヒルノ勇アルハ敢テ不可ナシ、蓋シ其勇
ヲ缺クカ故ナリト、田中モ同意シテ一二例ヲ挙ケ奉
ク、曰ク、ある日田中彼ノ獨逸語ニ
熟セザル、然ルニ獨人ニ交ルニ膳部ニテ獨語ヲ
以テ滑稽ヲ発シ、人ヲシテ哄笑セシメ彼ノ
言ハ所語ヲ忘ルルモ、其ノ不束ナル非ハ
却テ人ノ笑ヲ惹ケルニ過ギズト雖モ、又桂公ノ一例ヲ考
ヘ曾テ日獨協会ニ於ケル公ノ獨逸演説ヲ聴
ク、別ニ用意モナク矢鱈ニ弁ス、洵ハ支離滅
裂

製するもの共多くは素こんぶ、ヨシナ汁で時を移し、十時を過ぎて余は酒を勧められして余り肉を閑話す左右に花淵と原田あり、鶏肉を進めず、また伊勢海老を進めず、五十三四歳なんべ試みる勧盃とすると書付をそのまゝ婢とつゐて、幾人前の肉を食らはるやを問ふ曰く五十人前と、余笑ひて二三子の僅うる一人前を喰つて止まざるものを控除して算すれば七八子の夷こけ等は一人に付き六人前弱と為る、二十箱の他咲、数多くへし、茶碗の如き丼は蕎麦三人前位のを表らはるの飯を食すと、余祝して つゝ

海苔の他咲四十年前に異なる事なく真に人意を強ふすと

（五月一日録）

○塩原博士の洋行の途に上るに付一夕大隈侯伯記編纂者を共に迎送の宴を張る、席上大隈侯が多くの外人を延見せんとする際のことなどを、塩原常の通御の衛に当りたる為めに種々迎送を終りて中れ、侯は外交の辞令に巧みにして容易に人の術中に陥らず切に相手方の裏を探ぐこと常に怠らしが侯に対し往々露骨の質問を放つことあり、侯はこれを困らせんとす、斯る場合

又八百）海の衝に当り居る為め自分から露国に取次ぎ前に俄
国者と交渉して其の鋒鋩を避けることもあり、英
太子の如きは露国と為して一向に外交の話合を設
けず露骨の間を記されたり、其一例は太子が
微行して英を早稲田に訪ひたる時なり、太子は
露国に向て米国が戦後亜細亜殊に支那に向つて
干渉を為すの當否を露国に問ひ日本は米国と
為し如何の感かあるとなり、露国は曰く、支那とも
も貿易上の関係の深きは日本なれば之れを次くは
貴国なり、支那と為して米国答曰く

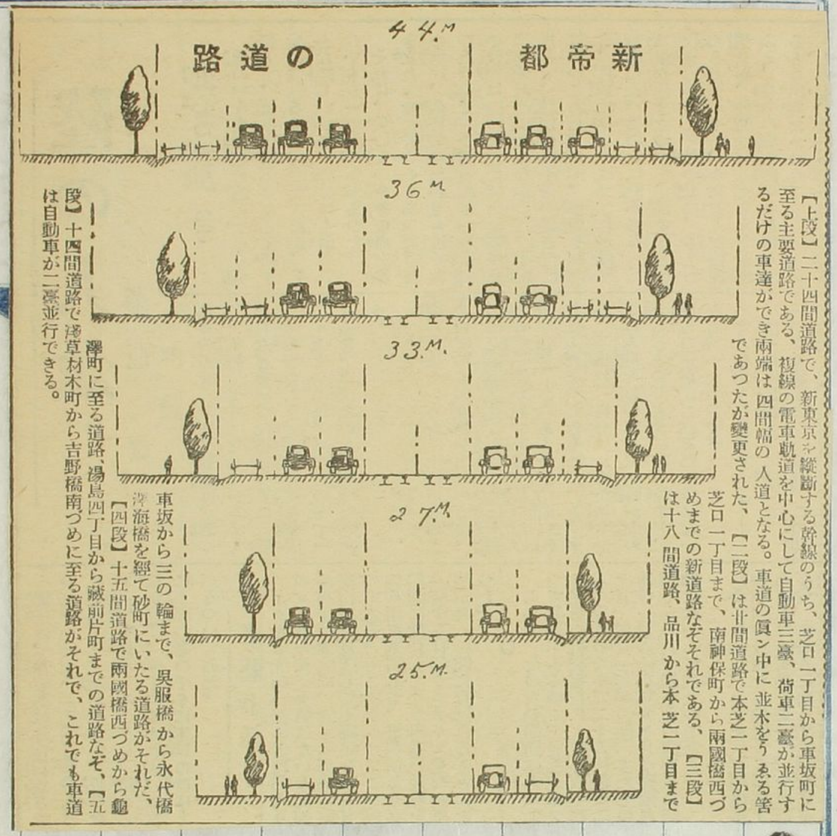
なり然し容易なるべしと雖も日英なると英国
子之れを為して曰く、唯だ米国は強く
日英の之れを為すを不満とし、太子の問ふ所
斯の如く他の場合に於て露国は露国の現日本政府に
不満なきやと重ねて問くりといふ、英太子の微行
は極めて秘密なりと雖し、長谷本
国にも電信を日本の言葉を掛らしめたる
おもむき、太子は露国の結果は米国外務省に
対電されたるおもむきなりと云ふ、外人中に
必ず記者の質問は何時も露骨なる
様の答あり

を嫌ふことを隱さ[illegible]ども、例
（日本に元光のあるは何故、元光は誰なりやと問ふ人あるも多し、度々こたへ[illegible]
るは何の印なるや、歟、市代の天子初中の時と
前朝の印法と事を諮詢せらるゝ也
我國元光は嵯峨天皇三條本尼大久保のことき
山科伊勢板垣[illegible]元光[illegible]と考へらるゝ、惟家
は自家の主として大限度とも深く考へらるゝと語る（五
月一日記）
の前日異人より木に松菊蘭の畫印は

印を載せて前と異なり、余家藏の名家印中に保
さ存ちんことを欲し、刻費を持ち帰り中のまゝ
真贋は度外に置き、徴する外なし、
昨日田崎桂香来る、話次山陽の書の師匠の
事、曾て馬場春雨の作る山
陽の河村文鳳と親しく初めまゐらと、余は豊後と
ゆかりとつきしも文鳳の方是か、文鳳
の画しる帝都雅墨一覧す、山陽の序あり
亦谷画と題詩あり、其の師匠なる旨なるこんある
か

桂香又云く山陽自刻の印三顆、蒼て山中信六郎の花瓶を一覧す、中に「四絃萬古」の四字を刻したる朱文一顆あり、しと、こん跡くく平淡の趣味を富しむるものなりん、又云く雲華一奇玩の南紀石山陽筆生茶獲んとして能わず、ひ手家の手に轉りして一旦卯花(?)の手に入り又出て、茶瓶を以て某家に帰すも、金沢「紫冊」の玩瓦を卯家の花瓶として若者と紹しとなるハ或ハ北の南紀石ならん

(五月一日記)



【上段】二十四間道路で、新東京を縦斷する幹線のうち、芝口一丁目から軍坂町に至る主要道路である、複線の電車動道を中心にして自動車三臺、荷車二臺が並行するだけの車達ができ南端は四間幅の人道となる。車道の眞ン中に並木をうゑる筈であつたが變更された、【二段】は十間道路で本芝一丁目から芝口一丁目まで、南神保町から兩國橋西づめまでの新道路なそそれである、【三段】は十八間道路、品川から本芝二丁目まで澤町に至る道路、湯島四丁目から藏前片町までの道路なそ、【五段】十四間道路で澤草材木町から吉野橋南づめに至る道路がそれで、これでも車道は自動車が二臺並行できる。

車坂から三の輪まで、呉服橋から永代橋海橋を經て砂町にいたる道路がそれだ、【四段】十五間道路で兩國橋西づめから龜

○京四半峯夫人の芝人足主疇村に嘱しとる印二顆

(五月二日記)

高安芝山自刻

木彫

筌庵刻

高安芝山和印

昌化石

高安芝山自刻木印

先頃婦人の架中既に大小三顆あり今又一を加ふ、芝山支那人顧氏に画を学ぶ由

彼の自家刻にて、名知の字子周、筌庵刻文の如し、此和印名家書印中に加ふべし

芝山遺作の寸珍画帖長三洲の詩書十二枚も収む、三洲晩年の作なるを思ふ其の寸尺若干筌庵の定尺と合す則ち印と共に会也婦人の手

五月二の録

芝山小高森碎器と共に紅いあるが同列に論すべき人であることをここに附記する

○先頃獲た楷隸の「来鶴亭朝」の印譜の各印に墨書の注記があって印文が記してある

桂香に示し以後一元して刻者の自筆なるを知る

○義もつかすみる如く凡小なるも

週報武藏野

第四卷第十九號（特別號）

大正十三年五月一日

武藏野館

電話四谷一四二一番

と過つた、昨日筆の塵掃て宣うて宵の内に寝
でまるで、氣がつかうなのでまる　五月二日記

一　大鹽中齋詩書　紙本竪三尺二寸四分巾一尺一寸五分

壽曉城中壽曉裏遠樓燕蓬
考亭晴紙上高樓撞巨鐘桑
榆日暮猶餘夢　大鹽濯纓

甲申春月十三日閲
山崎闇齋先生自彩色畫御寫真賛
寫其式賦しぬ　濯纓

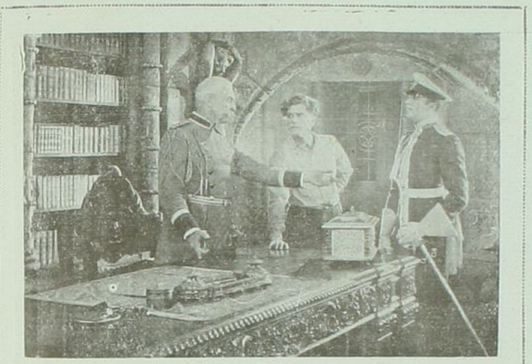
○昨日の光と仏の武藏野の活動寫真
を見る、風雲のセジン戦術寫真
其の寫真を記しなるプロログラムを收む、

セルズニック壮超特作映畫
アンソニー・ホープ卿原作
ゼンダ城の虜後日譚
ルリタニアの秘史

風雲のゼダン城

全九卷

Rupert of Hentzau



ルリタニア王 ルドルフ
ルドルフ・ラッセンディール
フラビア女王 エレン・ハムメル
ヘンツォー伯 ルパート パート・ライテル氏
伯爵夫人 ルガ リウ・コディー氏
サプト大伯 クレア・ウインザー嬢
ローザ・ホルフ ホパート・ボスウォース氏
ボーア マジョリー・ドウ嬢
リッシュン・ハイム伯 ミッチエル・ルイズ氏
シモン アドルフ・マンジュー氏
フオン・ベルンシュタイン エルモ・リンカーン氏
フリッツ・フォン・ターレンハイム アーヴィング・カミングス氏
ブライアントのウォッシュバーン氏

前編 ゼンダ城の虜の梗概

ミハエル公の惡計に依つて戴冠式の前日身の自由を失つたルリタニア王ルドルフの身代りになつた英人ルドルフ・ラッセンディールと美しいフラビア姫との間には戀が芽生えたが、自分の愛する王は實は英人ラッセンディールである事を忠臣サプト大佐から聞いたフラビア姫の心は憐れにも迷ひ、悩んだのである。ラッセンディールも胸に戀の痛手を負つたが飽迄もゼンダ城に虜になつて居るルドルフ王を救助する爲に忠臣サプト大佐と力を協せて大奮闘の結果惡臣ルパート一味を亡して、果敢かりし戀を深く胸に秘めつゝ故郷をさして永久に此の想出の國ルリタニアの地を去つて行つたのである……。

後編 風雲のゼンダ城の梗概

ゼンダ城の虜の物語から三年後の事である。死んだと信ぜられて居たヘンツォー伯ルパートは巧みに逃れて居たのであつた。フラビア姫とルドルフ王との婚儀は盛大に行はれた。併し姫は愛なき王の態度に淋しい日を送ることが多かつた。それにつけて彼女は嘗て戀を語つたラッセンディールの事が想ひ出されるのであつた。餘りの戀しさに姫は英國なる彼に宛てた手紙をフリッツ伯に托した。之を知つたルパートは伯を襲つて女王の書面を奪取して事を計らんとした。ルドルフは之を聞いて再びルリタニアの天地に來りフリッツ伯、サプト大佐等と力を協せ此惡に正邪は大爭鬪を始めるのである……。

風雲のゼンダ城の原作に就いて

藤浪無鳴

『風雲のゼンダ城』の原作者アントニー・ホープ卿は、英都倫敦フリート街、聖ブライド教會の牧師イー・シー・ホウンス師の次男として生れた。それは今から六十一年前、人皇百二十代孝明天皇の御宇文久三年癸亥（一八六三）二月九日。德川幕府十四代將軍家茂。此月英國は生麥事件の償金を要求し、米國ではリンカーンが奴隷廢止令を布告した翌月……で世界の風雲穏かならぬ時であつた。

オックスフォードのマルボロウ及ボウリオル大學に學び、最初から最後までの學位試驗に一番乙通した秀才で、在學中はユニオン・ソサイエティーの代表者であつた。

一八八七年（二十四歳の時）ミッドル・テンプルの法廷に招かれたが法律は專攻したものゝ裏心の欲求は文筆を以て世に立つ事であつたので、間もなく、セント・セイムス・ガゼットに短篇及スケッチを寄稿し（一八九〇）二十七歳にして其處女作 *My Mate* を *Mr. McNiv* と題する小説を出版した。其翌年（一八九一）年には『父老スタッフォード』、其翌年には『ウキッツ氏の後家』を出版して、年々出版して、其筆の溂達、自在にして 光彩駁離たるに讀者の心を奪ひ、編輯者の注意を惹いてゐた。

かくて一八九四年五月、『ゼンダ城の虜』（*Dolly Dialogues*）を出版して高評を博し、數週を距て、對話（*Dolly Dialogues*）を出版した。（是は、嘗てウエストミンスタア・ガゼットに何回かに分けて掲載したのを單行本として出版したのである。）

此二作は、其後、數限りもなく出た類書（一つの系統）を作つた幾多の作品の源泉であつた『ゼンダ城の虜』は、ロバート・ルイズ・スティヴンソンの『プリンス・オットー』から得る處あつて、作家の力を認められたものだが、此作の舞台たる『ルリタニア』が、讀者の興味を強く惹き起して、幾何もなく『ルリタニア物語』と呼ばるゝ作品の流行を見るに至つた。此一事を如何ばかり此作が一般の好評を博したかが解る。

此好評に曝らされて、讀者の切なる要求によつて『ゼンダ城』の後續なかゝればならなくなつて、書いたのが *Rupert of Hentzau*、即ち此『風雲のゼンダ城』である。

『ゼンダ城の虜』を出版してから四年（一八九八）作者三十五歳の時であつた。

作中人物、英國の使青年ルドルフ・ラッセンディールは作者自身の典型、英國紳士の冒險精神の具化であり、ルリタニア國王ルドルフ・エルフベルヒは暗愚王の典型である。『孟子の梁の惠王の章句下に、「齊宣王問ふて曰く流に從つて下つて（河に遊山船を浮べて）歸るを忘るる之なきか（流）と云ひ、流に從つて上つて歸るを忘るる之なきか（流）と云ひ、酒を樂んで厭くなき之なきか（荒）といひ、獵の遊び厭くなき之なきか（獵）と云ふ。獵に從つて（獵）流亡の行なし」と云ふ事があつて、先王を讃へてゐるが、ルドルフ王は、流連の樂みに耽り、荒亡の行ひに自ら身を滅す、暗愚君主の典型である。

今週奏樂

胡蝶夫人

プチニ作曲

「胡蝶夫人」の第一幕は長崎の丘の家の場である。イントロダクションの音律はフューグの形を備へたもので其の施律は全曲を通じて屢々管絃樂の方に現はれる、プチニが此の歌劇の中に日本の俗謡の施律を巧みに取り入れて居る事は驚くべきものであつて、我が好樂家は皆此の作を一通り研究すべきものである。

上映順序（自五月一日 至五月八日）

1 序樂 マイ・リットル・サンシャイン
2 實寫 英國のボーイ・スカウト
3 滑稽劇 若きダイアナ
　説明……山野一郎
　伴奏曲目選定……長谷川秋雨
4 社會劇 人の世の姿
　説明……高村秀雄
　伴奏曲目選定……長谷川秋雨
　（休憩十分間）
5 喜劇 武藏野實紋樂團
　歌劇 胡蝶夫人
　毛山平・輝雄
6 史劇 風雲のゼンダ城
　説明……國本寧夫
　説明……藤浪無鳴
　伴奏曲目選定……毛屋平吉

藝苑大震災記（八）

仙人掌生

●罹災の陶器

大震災で燒失破壞したる諸名家所藏の陶磁器は、隨分數多い事であらうが、今日判明せるものゝみを擧ぐれば、先づ

松平賴壽伯

所藏の、初代長次郎作七種の隨一銘「木守」茶碗を失ひたる事である。これは利休の愛玩したもので、利休が門下の諸子を會して、其の選むがまゝに所持の茶碗を頒與した時、唯一つ誰も遠慮して取殘されたのが、此の一器で、爲めに「木守」と自銘したのださうで、少庵より宗旦を經て、千宗守の家に傳はつた歷史ある重寶である。そこで今回松平家より、舊持主である、京都武者小路千宗守宗匠に、其の殘骸を送つたと云ふ。

又、同じ寶庫中には、名古屋城の金の鯱と共に、第一回巴里萬國大博覽會に出陳して、外人の眼を驚かしたる事のある名作、金の茶釜もあつたが鎔解して了つた。

森岡男

筑地の同男爵家では、先々代昌純氏の遺愛品たる名物瀨戸「妹脊山」の茶入を初め、玉子手「雪柳」の茶碗、備前「春雨」の茶入及び、薩摩「顏回」茶入、小濱井戸茶碗、繪高麗梅鉢茶碗、無地志野茶碗（これは名物帳記載のものではないけれども、品位は名物を凌ぐ絕品と稱せられたるもの）、宋胡錄柿香合（もと江戸の丹波屋に在り、俗に丹波柿と謂はれたるもの）、染付圓窓菊香合、靑磁桃香合、仁淸琴香合、赤繪四方入香合等、惜くも壞滅した。

內田薰作氏

祖母懷の陶士の作品で、唯一の名物たる「絃」と銘する茶入を火中したが、ノンコウ「夕暮」の茶碗は無事であつた。

酒井淸兵衞氏

光悅七種茶碗の一たる名物「鐵壁」茶碗を失つた。この茶碗は「大正名器鑑」を編纂するにあつて、之を一見した高橋箒庵氏が垂涎三尺に及んだ代物で、少くとも五萬圓以上には評價し得るものと、暗に意中を洩したることもあつた。

尙、天下屈指の名質と稱せられた南蠻の名銅罷も破損の厄に遭つた。この品は十年前、伊丹信太郎氏が「一萬五千圓」で割愛を乞ふたが、手離さず、十萬圓でも二十萬圓でも、この銅罷だけは門外不出、掛けては正に天邊一輪の月、打つては音三世十方を貫く、一佛眞人の聲も、今は夢となつた。

森岡平右衞門氏

熊川の茶碗、伊賀の花生を燒いた。

鹿島淸兵衞氏

中興名物藤四郎燒銘「吉光」肩衝の茶入を亡くした。

神崎平二氏

抱一上人舊藏の乾山作八角繪香爐と、古今里荒磯菓子鉢二對（一對は故早川千吉郎氏舊藏で、他の一對は金澤市の菓子舖森下森八氏の舊藏）を焦熱地獄に送つた。

九鬼隆一男

唐窯、宋窯、宋胡錄では日本一と云はれてゐた茶碗、其の他の陶器七八百點を空しくした。曾て英國オックスフォード大學の陶磁器研究家のシアス氏が、「九鬼さんの藏の燒物だけ一日見ても、他の散在する諸家を一週間訪問するの價値がある」と云つたが、洵に惜しい事である。

岩崎小彌太男

神田駿河臺の岩崎家では、その寶庫の三つとも燒落ちたがこれと謂ふべき名品はなかつた。然し深川の陳列館はスッカリ駄目で、今から遡る約二十五六年前、英人ブリンクリー氏が蒐集にかゝる東洋――主として支那――の陶磁器の名品を、當時五十萬圓に近い大金を投げて、日本に取戻したものがあつたが、悉く灰となつた。

安田善之助氏

本所の安田家では、染付の爐の王とも云ふべき前田家舊藏の一點と、遠州形物香合では、祥端在銘むき密柑吳洲赤玉、交趾臺布袋、それから、かの三崎龜之助氏が一生かゝつて集めた仁淸と乾山の一と藏を灰にした。

松岡忠良氏

金澤の素封家松岡氏は、大震當日鎌倉の別邸で病を養ふて居たが、天下の名品、光悅七種茶碗の內の銘「雪片」は、四つに開いた藏の中で七花八裂の災に遭つた。前記酒井淸兵衞氏の「鐵壁」と、七種茶碗が二箇まで同時に滅びたのは、何と云ふ悲慘な事であらう。

然し、松岡氏の座右には、茶器中の貴重品と目されてゐる靑井戸茶碗の中の首位「寶珠庵」が在つたが、家屋の倒壞した際、如何なる拍子か、屋上に飛び上つて無事に儼存して居るのは天佑と云ふの外ない。

原富太郎氏

橫濱の原富太郎氏では、其の邸宅及び倉庫、豐太閤の桃山遺構など、すべて火を免れたが、本牧山の松風閣に附隨して建てられた陶器館は、地震の爲めスッカリ滅茶〳〵になり、古伊萬里、古九谷、柿右衞門、ペルシャ、支那交趾等、世界的に誇るべきものが澤山あつたが、可惜悉く破損してしまつた。

龜田虎吉氏

世に隱れたるすき者で、日本ビール鑛泉の支配人龜田虎吉氏の日本橋螺殼町一丁目の藏で燒いたものは、無傷の瀨戸唐津皮くぢらの茶碗、津輕家舊藏彫三島茶碗、菅野藏帳の岩崎の茶碗、江岑所持備前〆切水指があつた。

細田安兵衞氏

茶道宗編流の宗、祖編の作として最も大事がられてゐた琵琶の香合、その寫しの是眞の作品、又同く「如是我聞」の茶杓を燒いた。

古筆了雅氏

光信下繪芦屋茶碗、利休共筒茶杓、利休作花生、遠州箱書茶入銘「遠山」を火に委した。

九月一日から三越七階で開催された彩壺會展覽會は、今度は日本以外の大陸陶磁器の多くの名品を蒐集展觀し、支那、

○古地弟子北邱を示す、刻名未比詳かならず、蓋本林元山北邱を為し、往々其書に用ひ、後竇津教堂の如し、

堂の如く、帰し今某家に属す、刻一経の風物を見る、

五月三日録

○山陽経学に短なり、彼人自から経説に非疏する所なの如し、而して易に関しては更らに言ふ所なきは、彼

れ、の見れに賴んとせし一証となすべきものなり、

昔人代五費精、無可以已 遠録 録 九経者亦新書也、苟有可論者、彼先論之、我何必在糟粕萬里外、注之釋之、豈能支吾、爾如四舎兒品評大都貨物、鮮不相笑也 讀五経正義

○日本外史を精読するに長川東洲に及くものなく、その文法は其の論説に著書の意を富するの秘を発揮して餘蘊なきものは北人に東洲は山陽の忠僕となして可也、余往年東洲の著書外史の論を読み多く得る所あり、頃日山陽伝を録するに方

り再讀感する所のこの多し、たゞ三四節を抄す、
先づ山陽の外史を修むるに左氏并に馬氏の文に
倣ふことを言い、時代こゝろ式ハたゞ倣ふに式ハ馬と
信じ宜しきなり）あことを論じて云く
左氏の文ハ人衣冠して堂に坐するが如く史記の文ハ青
と野と為るの氣あり、時代世ゝ異なれども而して其文各々
今に絶ゆるなし、外史を叙するあ家の文に於て互に其
長を用ゐ亦時世ゝ異なると雖ども他人の為に左氏を模
倣し史記を倣ふことをきんあるに故に平氏を記す
るに多く左氏を学び源氏を記するに多く史記を学ぶ

是し其風氣おのづきを異也

東湖山陽の一稿を摘録し、其の外史を修むる
文中菊池寛の履歴を點綴することを言ふ、是れ多くの
讀者の氣づく所なるも、列挙の詳如きハあらず
而して論賛十九篇を通覽すれバ、山陽の家譜を
見るが如しと云ひ、著者の意外史と共に自家の経
歴を高世に傳くんとする者なるも言ふ所の未だ
何人も言及せざる所也、余山陽録と山陽と紀行と
日録を隨者とせしと言ふ、詩ハ紀行
等者間ハ日録等者ハ隨者と為すと論

しかるに其の論賛と経歴あることの気附かざる
東洲の北一郎、余が誤を補益するの材料を
充つるを得べし

山陽外史を俗の家別に論述する家あり特に
傳を千古に伝ふるは其文の千古英雄を不
朽にすることを知りて其言ふ心者自から傳し自
からの朽を全うすることを知らず其西遊を平氏に叙し
東遊を源氏に叙し其数提携往来することを
楠氏に叙し江戸の遊を徳川氏に叙し鎖西士人所
在の元寇図巻を観ることを北條氏に叙し米

沢の人士と交游することを上杉氏に叙し其文を
武田氏に叙し其家を新田氏に叙
し而其文義の人をして言行を容易ならしめんことを毛利氏に叙す其
家個々時勢裏が家講ずることを是蛇光狡
僧を兼ねる歟

山陽が校勘する義例を定めて徳川氏を非難する
を加へけり一説に左の文の悪くたり
外史義例一にして足ず、論賛と別て最一大義例の
知るべきものあり、各篇必其好歟を指摘して

その石碑の文に敢て之をこゝの議論に加へ之を他
篇に著す、源氏猶長、晋用相倉、を平氏に論じ
平清盛の暴毋悍無忌、源頼朝の旋狙逕測を
楠氏に論ずるの類、比に皆所謂、金剛の譏を義
例にすることを免れざるのみ、況して未だ尾の一樹を
讀むを以て始て其真の本を悟る、蓋徳川
氏當代大権の在る所、称して将軍と云ふ、其
実は信長秀吉人主、とゝ議すべき事あるを論ず
こんを議することを得ず、故に者一篇を以て大論
賛の体只其功業を論ずる所以の者を定めざるへ

この末尾の一賛の為に早く其計策を公表せ
徳川氏の功烈既に詳かに之を論ずるを俟のみ
す、其議せざるべからざるものを議せずして止まへ
次篇を為すべき、既に首に為りこの義例を定
めざれば、獨り徳川氏のみ然るにあらず此を布告
深遠故に胸中先づこの一大義例を立て然後敢
て筆を下す、この意畢生一切人に向て語ること
能はず亦語るべからざるものの史氏猶知猶化、況
世間人の其意を察ぶるを以て之を是とす
山陽の叙事方氏の微られ中枢首将にして部署

するの法を用いることを示めす旗幟の特的なるへこと
う故なりとなせりとなく
山陽の叙事為に忠将大津を部署する法を用ひ知
ゆゑ器雄して部伍の整備する旗幟の特的なる一日
燦然たり後醍醐の皇統之を楠氏に書し大塔の宮
ハ之を新田氏に書し、北朝之を足利氏に書す、皆天将
諸将を部署し托するの方面を以するの法なり、この法
こんを左氏に得たり、大抵左氏文の特的叙る上に
あ軍勢を書するもの千古一点的と云へし
部人左氏を学ふもの皆こゝに達せす只其叙言を

論説を模擬して其主と通るとするこの豈能く
この境に有ることを得んや
論説十九篇ハ四家治乱の大議論に亘り、指示忠天
下の大議論括して北の内にあると云ふ即ち左のし
天下の諸大議論数十に過ぎず、外史論説一名之をとり
治乱得失の源こんを叙論と為し、王家興権を放矢す
るこ及て皇族の其為る為代りて其政を執らさ
べからさる之を源氏論説と為し、外寇国を侵すかい者
ことあらんば伐つて之を攘ひ吾天子の国を護せさる可
らさる之を北條氏に為し、勤王敵愾の国を竹く所

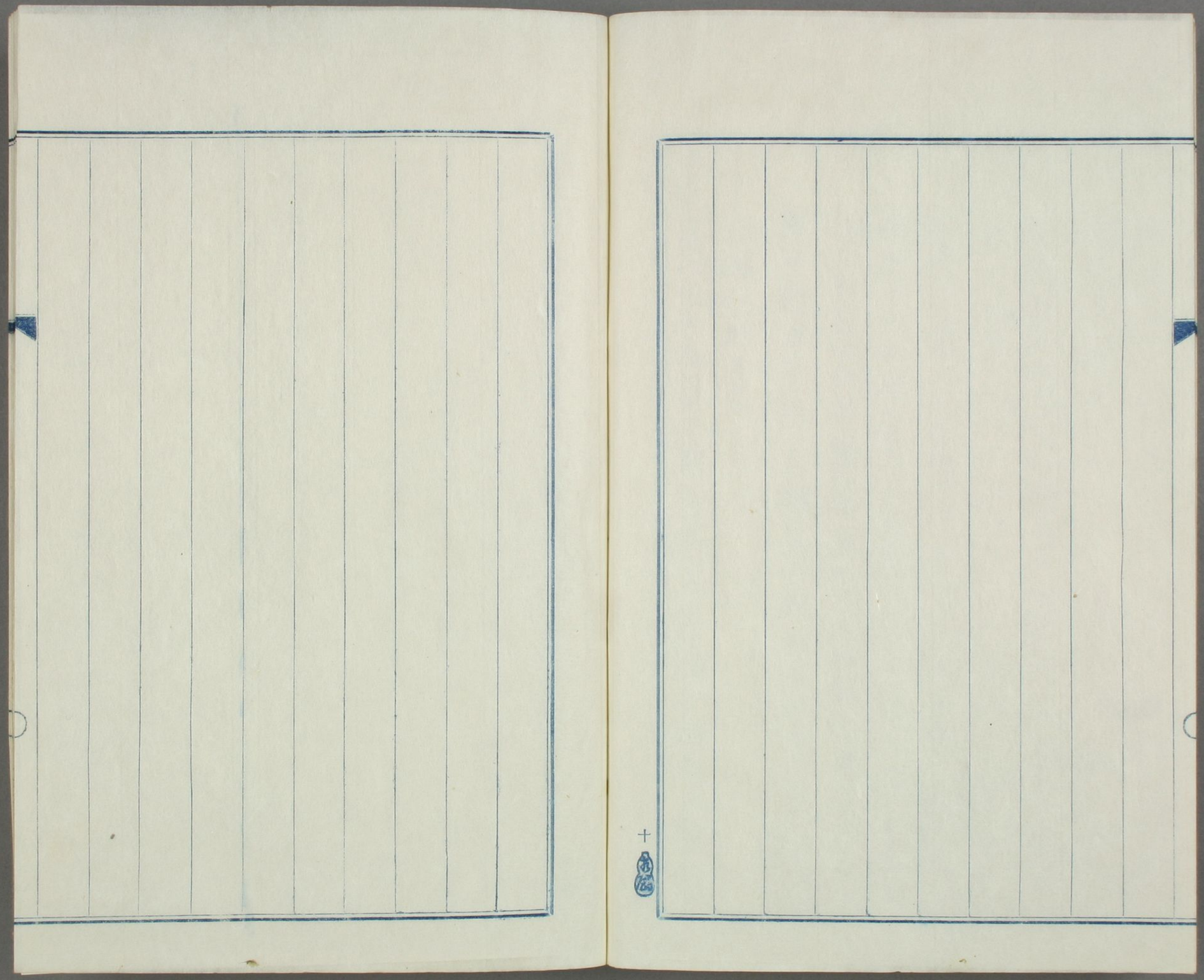
らざるを楠氏に劣し、幕府別に宮弾と撰ぶの論
陋之を足利氏に劣し、形勢分合之を後北條氏に劣ぬ
し、封建始末之を織田氏の叙論に劣す、只是個一の
数篇已に皇国全州の治乱を概論するに足るのみ
なり
山陽が論賛は漢学者の学と唐宋文を範とする陳腐
を免れず飽まで日本本位の立論を採りて云く
論賛十九篇皆言はざるべからざるを言ひ、論ずる
べからざるを論ず、必ずしも陳腐三代糟粕六
経を共用に籍く引かず、故に説得て皆恰好の言

十

……列る中
昊 丈云邦姫神の道を論ずるに当りて山陽
別に正法眼を開き卓然として神州開国の体を論
隅一を示し之を唐虞三代の上に置けり山主直
七経書の嚼餘を拾ひ其中世の天子唐制に慕
仿するを惜むを以て其書新奇なり余故に謂ふ
一叙論の一篇既に吾宗廟社稷の大義を及ぶ
子成言ある史之叙論、典論皆自別、不可不出色、
と外史叙論の如きは乃ち韓欧集中未有さる處
多く実に漢文あり乃ち未記者さる所其神州
所傳の古統に渝ふるを以て也 この種の渝論

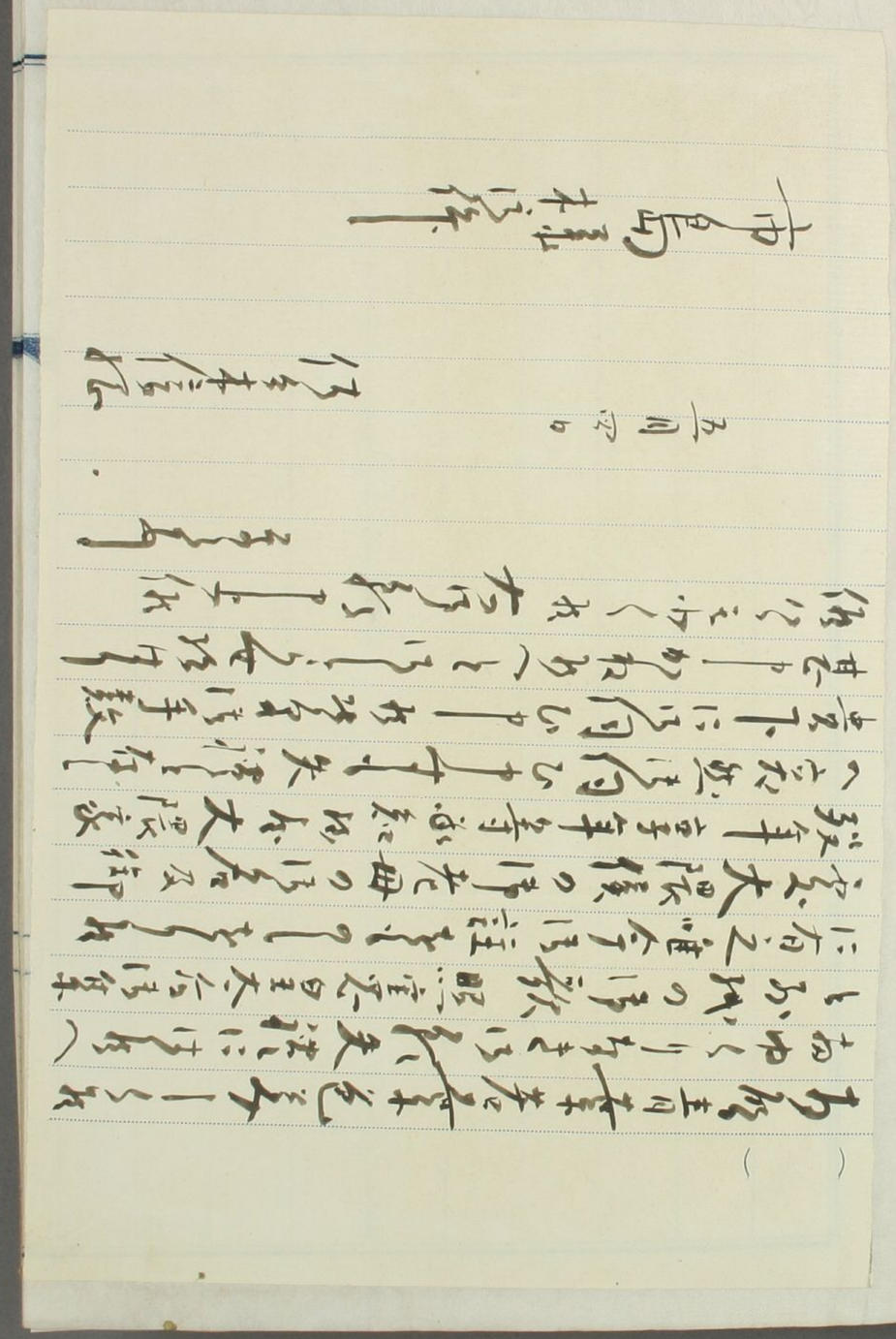
真淵宣長の徒子に出でて及び傍流に出づ是
何等の出色なりやを
十九篇の論賛文雖然裂のあるあり、尾張
通を言のを云
平氏の叙論は蓋我朝之初建四也と云平氏の賛は自
我光王之開国也と云是自ら開巻起筆の語徳川
氏賛は源氏平氏治少乱少と云是則一部を収拾
するの語見るべし論賛十九篇一部の日本外史を
総括することを云
外史の天下治乱を叙する跡を尋ぬるあり故に九

州諸豪の如き大勢に関係するものは別に傳を立てず
とすると左の説あり
近古雄武を絶する徳は四族に止るかごとき後世武士
移り蓋中世以来風氣東遷し西南二道の出地甲
兵天下の治乱に関かるを足るものを観る故に大友
島津龍造寺及び毛利氏の為に傳を立す
後に他巻他紀に附述す、この表作者却て的確
す後北条氏の叙論天下の形勢を論じて股肱
胚胎の一句を下すこと、これ表を作する所以
なりと



きよらなるはちすの絲の一すぢにいのりし老か心をそた
もふ

右明治十一年大藏卿大隈重信の老母か年月とりあつめし蓮の絲もておりいでたる佛像をたてまつりしを見そなはして下し賜へる



[illegible]の家の[illegible]家と伝承[illegible]氏[illegible]の人、前代伝承[illegible]清名[illegible]小彭宮の大年[illegible]
秋三[illegible]右衛門、常[illegible]山陽春
[illegible]と小田石谷の寓居[illegible]今[illegible]時、酒次山
陽[illegible]大賊[illegible]一抑、大年[illegible]一幅[illegible]
[illegible]北[illegible]花[illegible]、[illegible]詩山陽の集に[illegible]するう
[illegible]

雲作[illegible]雖不起[illegible]一輪輾出度時
宝[illegible]来携酒仍[illegible]用至自西[illegible]

自東杯映金波浮太白燈庭[illegible]柳失
遠紅王生腹[illegible]沖起[illegible]

句未工、
山易[illegible]修[illegible][illegible]云[illegible]悔自
東春梁至自西[illegible]城[illegible]嘉大年
携具而来

哭阪口五峰先生　吟風　河合直次　越前

孤燈明滅夜蕭然。悲報忽驚天外傳。墨水櫻雲陪畫舫。白山松籟共詩筵。恩兼師父懷遺教。義約弟兄知宿緣。廿歲交游眞一夢。淚垂秋雨破窓前。

痛歎中流砥柱無。狂瀾將倒賴誰扶。憂時辯說鋭如劍。警世詞章明似珠。人擬偉才堪宰輔。身持清節老江湖。蓋棺今日論全定。眞個堂堂大丈夫。春石曰。稱揚才幹感念交誼。語語徒肺腑中流出。便爾沈着深摯。

蓮月尼の幕難と勤王思想

村上素道

一　勤王思想の來由

中根叔の「香亭藏草」中に蓮月尼傳の事に就いて旅館の主人の語（祇園の娼婦等といふ）に誤られて、多年尼の人格を誤認せし事を懺謝し、併せて世の文筆に任ずる者の故人の傳を編するに至つては、大いに自ら誡め十分の考證を得べきであると書いてゐる。是れは大いに然るべきことで、殊に蓮月尼の傳に到つては斯の意を痛感する次第である。尼の「全集」は近き將來に出版する心算で、傳記も委曲にそれに載せる考へであるから、今茲には單に尼の勤王思想に就いて少しく愚見を陳べ、世の指教を仰ぎたいと思ふ。

尼は寛政三年一月八日に生れ、明治八年十二月十日に八十五歳で歿してゐる、先づ斯の尼の在世の時代を概念する丈て如何に波瀾曲折に富める時代を背景としたるかを知らねばならぬ。次には尼は武門（藤堂家）の血液を稟けたる上に、彼の八歳より十八歳までを龜山城に奥勤めをして、長刀、鎖鎌、撃劍、柔道も修得したといふから、斯うした血液と學歴上から來る思想とは、何うしても勤王思想に趨るべき素質を具備してゐた事も知らねばならぬ。更に尼は八十五年の長生涯を京都に於て終始して龜山十年の外未だ一年も他國に住んだ事が無い、特は尼の五十年時代から七十六歳、慶應二年秋西加茂村神光院の茶所に移るまで、三十年前後を聖護院宮の境域に住みたるのみならず、尼の養父大田垣伴左衛門光古（みつひさ）は華頂宮に事へてゐた、殆んど蓮月の一生は皇室の恩光に浴して生涯したと云うてもよい、尼の温厚にして忠直なる思想は何うして皇室を思はてゐられよう。尚ほ尼の勤王思想を餘儀無くさせたものは尼が朝夕交る天下の名流である、當時天下の名流は京都に入つては必ず蓮月を訪問するを以て一時の不文律にしてゐた、蓮月は幕府の監視も五月蠅く恒に屋越しをして是を避けたが、如何せん桃李語らずしての例で、屋越先へ〳〵と訪はれるので、遂には一年に十三度移つたといふ、「屋越しやの蓮月」の綽名（あだな）も蓋し偶然ではない、以て訪問者の多かつた事は推して知れる。訪問者の多くが文人墨客武士僧侶といふ風だから當時幕吏の鋭き目に漏れる筈は無い、蓮月は陶器を製して活命のタツキとして全然世捨人でありたかつたであらう、が、さて世の中はさうはさせない、又自らもさうは出來無かつた、それは斯かる周圍の事情からである。

二　尼の盗難と毒害

尼が未だ岡崎聖護院村にゐた頃、或夜丑滿つ頃大の男が戸を外して入り來り、「尼さん金出せ」といふ、尼は別段驚きたる樣子も無く、臥したるまゝ「お前さんは門違ひぢやないか金なりと何なりと有りと思はん程の物は、何なりと持つてゆきなさい」とて、自分もそろ〳〵起きて火鉢の火を撥き作ら强盜のする所を見てゐると、押入の角などから着替を取り出す、尼は大風呂敷を出してやる。「お前さんは充腹でもあるまい、湯を沸かしてあげやうから茶漬けでも食べては何うか」ときく、賊は「いやそんな優長な事はしてゐられん」といふ、尼「それなら昨日の朝近所から貰つたハッタイの粉（麥香煎）が有るが、あれを溫湯でまぜて食べては何うか」賊「それよばれよう。それなら暇は要るまい」といふので、尼は貰つたまゝの香箱から茶碗に移し、鐵瓶の溫湯を以て混ぜ〳〵して、三杯までも食べさしてやつた、賊は食べるなり早々に出て往く、尼は戸外まで送り出して、さて元の座に直り、

白浪のあとは見えぬと岡崎に寄せきし音は猶のこりけり

等とうめき、亦蒲團を被つて枕に就き、うと〳〵とすると、字南禪寺の百姓（知人）が「蓮月さん〳〵」と戸を叩く、驚いて目を覺し戸を明けると、はや世間は大いに明るい。

尼「まあお早う御座ります何か御用ですか」

百「いや私しなあ今朝早く畑へ小便擔いで行きますと、蹴上へ出る路に人が倒れてゐるから、これはしたりと擔を卸してこわ〳〵側へ寄つて見てゐると、又二三人畑へ出て來たのでそれ等と種々と其死人の樣子を見てゐる〻、背に大きな風呂敷を脊負つてる、さうして風呂敷の端に「蓮月」と書いてあるので、それで一同が是れは岡崎の蓮月さんの使と見えるといふので、私はあんたと入魂の中だから取敢ず走つて來たのどす、あんた大津へでも使でも出しなはつたか……」

尼「それは〳〵御苦勞さんでした別に私は使を出したのでは無いが、昨夜深更に及んで顏知らぬ客人があつて、種々貧しいお話しであつたから、自分のつまらぬ物をいろ〳〵取出し風呂敷も進ぜた次第です、それでは其人でせうか……」

百「あんたは相變らず氣の好いことを言ふてゐなはるなア、それでは又盜人に遇ひなはつたか、恰度それに違ひない、まあ係り合せで仕樣がない、あんたも一返來て見てやりなはれ……」

といふので、蓮月も據ろ無く往つて見た、處が大變吐血してゐるので是れには大いに驚いた。

其の内役人が出張して檢査の上彌〻毒殺といふことに極つた。尼は斯事に座して四五度も當時の裁判所へ招喚された、が、彼のハッタイの粉の出處に就ては、何度詰問を受けても尼「私は獨身者でハッタイの粉は便利で御座ります處から、諸方から頂きますので一向覺えが御座りません」

の一點張りて通した。さうして遂に此事件は結局有耶無耶に葬られて仕舞つた。ハッタイの粉に毒を混ぜて近隣の老婆にくらはせて運ばしたものである。尼の平生仁慈の德は圖らずも天の助けて强盜が身替りに立つた譯である、幕吏も斯の自然の德者にはこの毒手が施こせなかつたのであらう。當時世間で專ら風說して「蓮月さんも遂々幕吏の爲に斃まれた」と、言ひはやした。斯の話しは京都市富小路三條上る眞宗寺の院主から私が直話に聞いた。院主は三輪貞信から聞いた、貞信は尼の歌朋友で斯の事件を委しく見聞した人である。又た斯の反證として見るべきは、尼の自筆の傳に、

命のみ長くて老ゆく程に世の中騷がしくなりて「夢の世とおもひすてても むねに手をおきてねし夜の心地こそすれ」恐ろしければ北山の邊り西賀茂といふ所ににげいりて「露の身をただかりそめにおかむとて草ひきむすぶ山の下かげ」……

「恐ろしければ」の一言は幕吏の毒手を暗に語つて爲るのであらう。蓮月の胸臆は最早や毒手も恐ろしくは無かつたであらうが、且ア斯う書いたものであらう。

三　七卿西竄に餞けす

さて勤王の思想を語るべき段取りと成つたが、尼の勤王思想は爭はれぬ詠草が幾らもあるから後に附して參考に供して置く。その詠草は別として、尼に勤王思想の熱烈であつたと思ふことは、七卿の西竄に際して平生の熱鐵腸を三十一言に托して捧げられた事である。

頃は文久三年九月十九日の未明に妙法院を出でられ雨の篠衝く中を七卿は蓑笠に身を固め、徒步にて武田街道を西南に向ひ伏見に到り、伏見より船路を採られた等は、世の普ぬく知る所である。七卿が前後に數張の提燈と數百人の長州武士の鎗の穗先とを、雨の夜に閃かしつゝ（幕府の奪取を豫測して）南下せらるゝに際し、武田街道に深き被を着て一人の尼が立つてゐて、七卿の姿を拜み畢つて、つと進んで一人の從者に就て一葉の短冊を捧げ、

尼「恐れ乍ら腰折を一首お取次を……

從者は默したまゝそれを受取つて去つた。短冊は愈〻伏見で三十石に乘つてから、初めて條公初め一同へ披露されたといふ。蓮月の心盡しが屆いたのである。

尼が何うして極秘に行はれた七卿の退京時刻を知つたかに就ては、何うしても勤王の三傑僧、梧菴、天章、晦巖の内、梧菴と尼との交際を語らねばならぬ。

梧菴は東山建仁寺の塔頭での一番財產家の清住院の住職で彼の太閤北政所の開基なる高臺寺をも兼任し、身方外に在るも尊王の志甚だ深く、常に大原重德の門に出入して大いに周旋する所があつた。特に長州の久阪義助、木戸孝允、山縣有朋、品川彌二郎、鳥尾小彌太筑後の眞木和泉等は尤も親く往來した、其間に清住院高臺寺の資財は悉く志士に貢いで仕舞つた。尙ほ明治元年には建仁本坊寺各寺等を遊說して多く〻軍資を捧げたりした。嘗て文久三年七卿西竄後は一錫飄然として諸國行脚に出で、到る處に勤王を唱へ、元治元年六月に再び清住院に歸り、堺門の變起り久坂義助は戰死し、眞木和泉は天王山に入りたりとの報に接し、直ちに往いてその殉難の跡を弔ひしといふ。

梧菴は近く御贈位にも成るやに聞くが、特に勤王の志厚く中にも長州人に深かつたのである、長州に十分の理解を持つ梧菴は七卿西竄に疎い筈は然い、疎い處で無い梧菴の一生は

七卿落を以て一段落を劃してゐる。以て梧菴の全力を濺いてこの七卿落には内外となく奔走した事が解る、況んや大原重徳の帷幄に參じたるをやである。蓮月と梧菴の交りは斯の文久頃を以て最高潮に達した時と見ねばならぬ。文久三年は梧菴は四十九蓮月は七十三で、其翌慶應元年に野村望東尼が蓮月を訪ねてゐる、其翌年の秋には尼は西加茂へ移つてゐる。最高潮に達した兩人の交情に他に同寺建仁寺管長の天章も親しく交つてゐる、何うしても梧菴から蓮月は七卿退京の時刻を聞かんことはあるまい、梧菴も亦た蓮月には諸般の機密を心措き無く語つてゐよう。蓮月が七卿の傷ましき都落ちを聞いては、彼の同情深き氣質として坐ながら默してはゐられなかつたに違ひ無い、遂に滿腔の同情を一首に認め、之を懷ろにして、潛かに武田街道に立つたのである。梧菴の太平日記は百卷に近くもあつて其大部分は宮内省へ納まつたのだが、其の殘餘が鳴瀧の妙光寺にある、其内に明治三年三月十日の處に、久しぶりに西加茂の尼を訪うて、世の有樣をしみ〴〵と語つてゐる。又明治九年正月十日の下には尼の月忌を勤めてゐる。其前日に「枯れて立つ蓮の露の月かげのかたむく西の空ぞしのばる」と弔歌を詠んでゐる。太平日記を周覽したならば、必ず未だ〳〵尼の事も發見出來ようと思ふが、及ばぬ事で殘念である。

先年御贈位に成つた與謝野禮嚴と蓮月の交際も亦梧菴己上のものがあつた、それは最愛の長子（今の勸修寺門跡和田大圓僧正）を尼に托して、神光院に送つたに見ても其一班を察することが能きる。（禮嚴法師歌集參照）其外越前福井の橋曙覽の如き不可思議なる尊皇敬神の結晶ともいふべき人物も、恰度梧菴と前後して尼と交際してゐる。

そこで尼の七卿へ餞けの事は自然の發動として出來た事で私は京都の老人二人から斯の事を聞いた。未だ七卿の始末書にも見受けぬが、慥かに書いた物もあるといふことで、私も熱心にその書を物色してゐる。

それ等と踵々と其死人の樣子を見てゐる、背に大きな風呂

四　三條橋邊征東軍に餞す

蓮月の一世一代の快擧は、明治元年春伏見鳥羽の役後、廟議一決して江戸屠るべしといふ、其皇軍の都立ちの時である。

總督有栖川宮を征東大將軍に拜し、島津忠義、毛利敬親兩公が先鋒の大命を受け、彌〻王都を發程せんとした時、滿都の四民は言ふまでも無く洛外近畿の者までも今日の晴れの出陣を觀んものと群集した、遉がの都大路も立錐の地無き騷ぎであつた。先驅隊は各〻屯所を繰出し、三條通りを東へ東海道の第一歩三條大橋へ差掛らんとした、時に橋の西詰南の袂に一老尼あつて竚み立つ、

先驅「下につ下につ」

群集動めき犇めき一尋ばかり退く、然るに件の老尼は衆を離れて自若として立つてゐる。

先驅「下につ」

老尼は尚ほ自若としてゐる。先驅の武士意中潛かに想ふ、京都には宮方の尼僧多し、或は然るべき人ならんかと（尼の美貌も慥かに一原因を爲したらん）乃ち注視して去る、後々の兵も皆な注視して去る。一陣二陣と漸く進み、彌〻中軍の到るに及んで先鋒の總大將島津忠義公馬上裕かに、威風堂々あたりを拂ひ、侍衛甚だ嚴である時に、老尼つと進み出で、公の馬後の一衛士に就いて、

尼「失禮て御座りますが御餞けの一首……

途端に緊張せる衛士は、四五人して忽ち尼を取り圍む、公の馬は進む、直ぐ背後に打たせたる西郷は、君の侍衛の一老尼を取圍むに氣付き、押し切つて出て尼に對し、

西「何んでごわす……

尼「私は西加茂に住む蓮月と申す朽尼で御座ります、目出度御出陣恐れ乍ら腰折一首を奉りたい、何うか御取次を……

西「さ樣でごわすか（短冊を受けて一讀す）

てきみかたかつもまくるも哀れなり同じみくにの人とおもへば、

ああ解りました〳〵、私は吉之助でごわす、宜しく取計らいますから、御安堵下され、難有うごわす……

是れに由つて尼も非常に滿足して退かれた。さて斯の夜大津が本陣で、西郷は忠義公の前に出で、

西「今日三條大橋で蓮月と申して都で名高い尼さんてがすが御餞けにとて差出しました……

忠「フム、（短冊を手にして讀む）

西「一老尼の繰言ではごわすが、而も是れ天の聲時の聲でごわす、朝議の趣きはさる事ながら内憂外患の今日是れは此度は一工夫易へねばなりますまいか……

忠「フム……

扨て翌朝大津を發せし時の機鋒は京都を發ちし昨日の如き意氣衝天の概は無かつたといふ。

後年、福地源一郎の脚本で東京木挽町の歌舞伎座に於て此歌を中心にして左團次の上演せしには「有栖川總督宮へ、京都の或宮方より一老女官が早打にて駈着け、斯の歌を捧げ、是れに據つて總督府の軍議は一變した」と樣に、替えて演つたといふ。

是れ丈の話は京都の宮崎半兵衛氏から斯の通りに二度聽いた、尚ほ宮崎翁は言はれた『斯の話は慥かな事で、私は來野文平氏（二條西洞院に住す）から委しくきき、更に宇野某翁からも聽いた宇野某は西郷さん等と事を同じくした人で、來野文平氏は薩摩と禁中との間に盤桓せし人です。先年も牧野宮内大臣が御來京の節に、義を見てせざるは勇無きなりといふ事から、時局に對して大いに御奮發が願ひたいとて、其次に右の話をして蓮月も西加茂にゐて只歌を讀むだ丈では彼の意旨も貫徹せなかつたでせうが、三條橋邊へ出て來たといふは、謂ゆる義を見て爲すに勇んだのでせうと申上げた。大臣も「それは私は初耳だが海江田や兄の大久保は知つてゐよう」と仰しつてでした。併し彼の當時もほんの帷幄に參じた人丈が此事を知つてゐて、而も非常に秘密にした事であるとも聽きました。それは成程萬乘の大君から大命を拜して出帥せしものが、未だ王都を離れぬ内に、一老尼の一首の歌の爲に其機鋒を折くと言うては餘りに事が輕卒に聞える、由つて旁〻極秘に附したは至極道理な事でせう……」是れ丈が宮崎翁の話である。

私は其後京都日出新聞にも是を出し、外に一二の冊子にも

七卿落を以て一段落を劃してゐる。以て梧菴の全力を濺いてこの七卿落には内外となく奔走した事が解る、兄んや大原重たゝ章と蟄々と其死人の様子を見てゐる、背に大きな風呂覽の如き不可思議なる尊皇敬神の結晶ともいふべき人物も、書き、亦た島津邸にゐられる西村天囚先生（先生は尼の傳に就いて十幾年前から非常に熱心に研究され、大阪朝日に四五回連續して出してゐられる）書簡を出してお聽きした、併し皆な沈默で何處からも何んの言も聞かぬ。

恰度梧菴と前後して尼と交際してゐる。

設し斯話が事實とせば、尼の全傳を飾るに足るもので、先日も八代大將に此話をすると「それは西郷の傳にも書きたい話だ」との仰せであつた。私としては宮崎翁（博聞强記の人）の話で十分であるが、願はくは薩摩の古老の話として、他からも一度聞きたい。設し今一つ證言を得たならば尼の赤心鐵腸が彌〻明らかに成り、征東軍の第一機を制したと成れば、隱れたる維新史の一斷片として永久に傳へたい。又傳へねばならぬ美譚である。

尼は明治元年は七十八歳で西加茂入りの第三年目であるが私の今日までに見た四百通已上の書狀（尼の實筆）に見るに、其頃は完く京へ出ぬでもなかつた、必要な場合は或は徒步で或は轎子を借りて出たらしい。伏見鳥羽の役後征東の事あらんとの風說は洛の內外といはず全國に宣傳されたであらう、況んや洛北西加茂に於てをやだ。西加茂の巷へは「日々二本差いた人が詰めかけた」ときく（西加茂の老人に）から尼も未だ其頃は決して枯木死灰ではゐられなかつたであらう。「斯の行必ず國家の一大事である、若き大將の爲に一言を進めたい」といふ、尼平生の熱誠臆が迸發したものと見える。今左に尼の國事を詠じたるもの數首を出し、讀者の一考に備へて置く、若し同樣の事の片鱗でも聞かれた人は何うか京都山科

五　勤王思想の詠草

いにし文月十九日のあした

ひとかたになびなきもあへずいとすすき亂れゆく世の秋ぞかなしき

その日すなはちしづかになりぬとききていとすすきひきていにしときくからに東風のつよきを思ひこそやれ

やはたに官軍おかちなりと承りしをりいぶきます風にあられのはら〳〵とうちちらされてきえやしつらん

伏見に軍ありとて火災の音いみしくひびき渡りけるをり

餘所にきく音もはげしき時つ風花の都をちらさすもかな

失題

そのかみの神のみいづのいちしるき光りを今も三日月の影

山ばなに陣をとりたる人の許へ

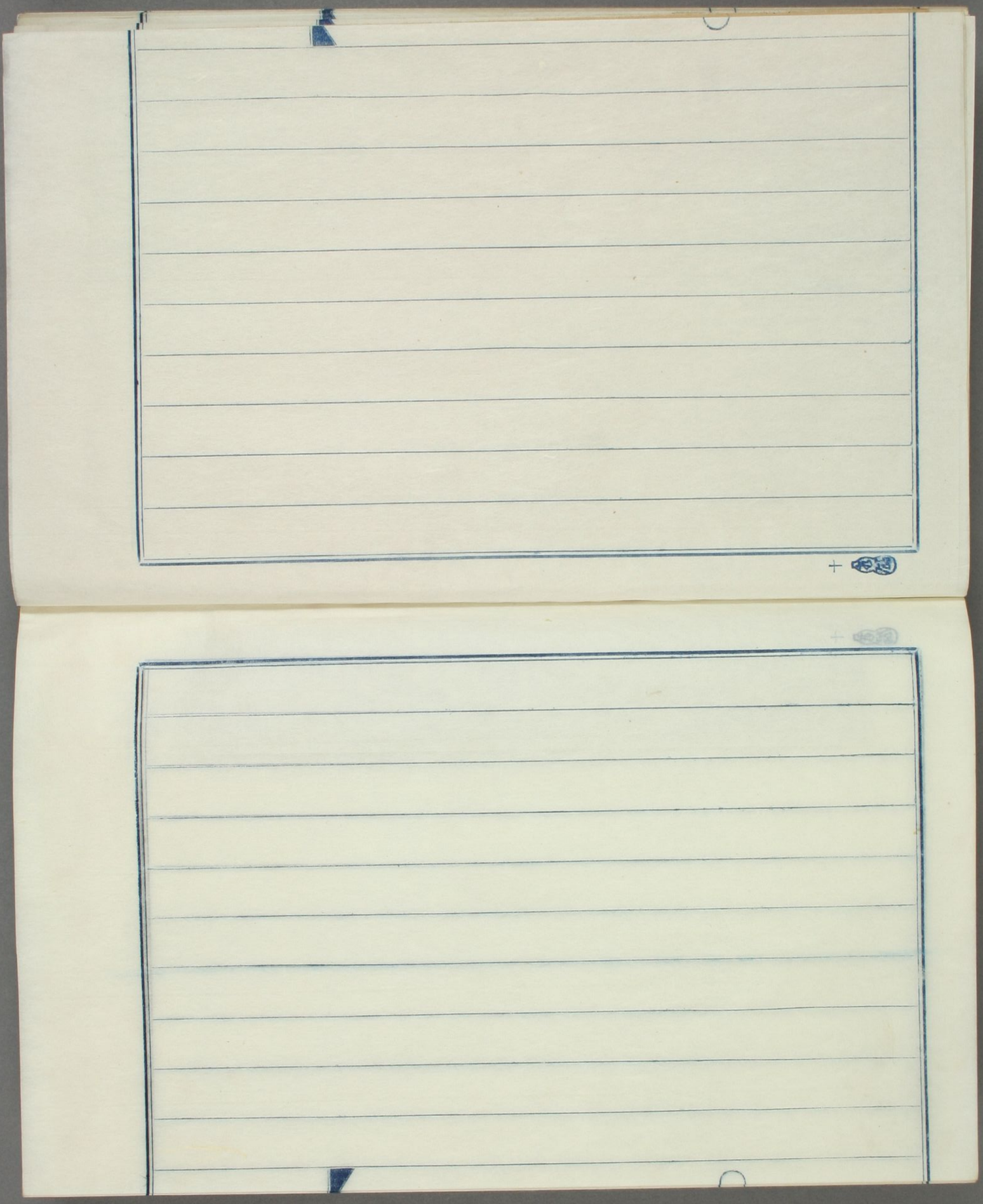
松が根によろひかたーきながむらん比えの高嶺の冬の夜の月

櫻井の里を訪ふて

うみの子にいひのこしけんま心の花にゆかしき櫻井の里

あめりか來春きたるといふ年の暮にふりくとも春のあめりかしづかにて世のうるほひにならんとすらん

折にふれて



以下全て

白　紙